

例 言

1. 本書は、浜乃木四丁目宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は松江市教育委員会の委託を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。
3. 本書には、平成26年度に実施した茶山遺跡発掘調査のほか、同年度に松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課埋蔵文化財調査室調査係が実施した、茶山3号墳の調査成果が含まれている。
4. 遺跡名称、所在地、現地調査期間、開発面積、調査面積、調査組織は下記のとおりである。

(1) 遺跡の名称、所在地

名 称	茶山遺跡
所 在 地	島根県松江市浜乃木四丁目896外

(2) 現地調査期間 平成26年6月5日～平成26年8月4日

(3) 開発面積及び調査面積

開発面積	約5600㎡	・	調査面積	763㎡
------	--------	---	------	------

(4) 調査組織

依 頼 者 新生不動産株式会社

主 体 者 松江市教育委員会

事 務 局 松江市歴史まちづくり部

教 育 長 清水 伸夫

部 長 安田 憲司

＊ 文化財統括官（埋蔵文化財調査室長兼務）錦織 慶樹

＊ まちづくり文化財課 課 長 永島 真吾

＊ ＊ 埋蔵文化財調査室 調査係 係 長 赤澤 秀則

＊ ＊ ＊ ＊ 専 門 企 画 員 穴道 元

＊ ＊ ＊ ＊ 副 主 任 徳永 隆

調査指導 島根県教育庁 文化財課 調 整 監 椿 真治

＊ ＊ ＊ ＊ 主 幹 深田 浩

島根大学 法文学部 社会文化学科 准 教 授 岩本 崇

実 施 者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理 事 長 清水 伸夫

＊ 埋蔵文化財課 課 長 三島 秀幸

＊ ＊ ＊ ＊ 調 査 係 係 長 古藤 博昭

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ 調 査 員 江川 幸子（調査担当者）

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ 調 査 補 助 員 宇津 直樹

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ 調 査 補 助 員 渡邊 真二

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ 調 査 補 助 員 後藤 哲男

調査に携わった発掘作業員（50音順）

岩成博美、大西将祺、加藤恵治、角田ミヤ子、錦織勝美、秦岡民枝
秦岡富士子、福田紘治、細田信子、細田勇治、吉岡水子、和田 章

5. 本書に記載した遺物の洗浄・復元・実測・図面浄書は以下のものがおこなった。
坂本玲子、塩田陽子、宇津、江川
6. 本書に掲載した現場写真は江川、渡邊（本調査）と徳永（試掘調査）が撮影し、遺物写真は江川が撮影した。
7. 本書の作成にあたっては下記の方からご協力をいただいた。記して感謝する。
鳥根県教育庁 鳥根県埋蔵文化財調査センター 企画員 東森 晋
8. 本書の執筆は、第1章と第4章第1節を徳永、第4章第2節を上山晶子（鳥根県教育庁 鳥根県埋蔵文化財調査センター 調査補助員）、第2、3、5章を松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川が担当し、編集は江川がおこなった。
9. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
10. 本書における遺構記号は、下記のとおりとした。
SK：土坑 SX：不明遺構、その他
11. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	2
第3章 茶山遺跡（南側）の発掘調査	5
第1節 調査の概要	5
第2節 古墳群等の調査	9
第3節 北側土坑群等の調査	30
第4章 茶山遺跡（北側）の試掘調査	40
第1節 茶山3号墳の調査	40
第2節 赤色顔料の蛍光X線分析について	45
第5章 総括	49

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	鳥根県・松江市位置図	1	第20図	2号墳第3主体部実測図 (S=1:30)	24
第2図	茶山遺跡と周辺の遺跡 (S=1:25000)	3	第21図	近世墓1 (SK01) 遺構実測図 (S=1:30)	25
第3図	茶山遺跡位置図 (S=1:5000)	6	第22図	近世墓2 (SK02) 遺構実測図 (S=1:30)	26
第4図	茶山遺跡調査範囲とグリッド設定図 (S=1:600)	7	第23図	近世墓1 (SK01) 出土遺物実測図 (S=1:3)	27
第5図	茶山遺跡 (南側) 遺構配図 (S=1:200)	8	第24図	近世墓2 (SK02) 出土遺物実測図 (S=1:3)	27
第6図	古墳群平面図と断面図 (S=1:150)	9	第25図	埴輪壺 (SX01) 実測図 (S=1:3)	28
第7図	茶山1号墳 (S=1:100)	10	第26図	遺構に伴わない遺物実測図 (S=1:2)	29
第8図	1号墳墳丘セクション (S=1:60)	11	第27図	北側斜面北壁セクション (S=1:60)	31
第9図	1号墳周溝出土遺物実測図 (S=1:3)	12	第28図	SX02~SX05実測図 (S=1:60)	34
第10図	1号墳主体部実測図 (S=1:30)	14	第29図	SX06、07実測図 (S=1:60)	35
第11図	1号墳主体部の遺物、石出土状況図 (S=1:30)	15	第30図	SX08~SX11実測図 (S=1:60)	36
第12図	1号墳出土鉄製品実測図 (S=1:2)	16	第31図	SK03~SK13 (S=1:40)	37
第13図	茶山2号墳 (S=1:100)	17	第32図	加工段01、02実測図 (S=1:40)	38
第14図	2号墳墳丘セクション (S=1:60)	18	第33図	遺構に伴わない遺物実測図 (S=1:2)	39
第15図	2号墳周溝出土遺物実測図 (S=1:3)	19	第34図	T7調査区 (主体部) 実測図 (S=1:30)	41
第16図	2号墳第1主体部実測図 (1) (S=1:30)	21	第35図	T8調査区実測図と周辺地形図 (S=1:100)	43
第17図	2号墳第1主体部実測図 (2) (S=1:40)	22	第36図	3号墳墳丘想定図 (S=1:400)	44
第18図	2号墳第2主体部実測図 (S=1:30)	23	第37図	赤色顔料関連埴輪	46~48
第19図	2号墳第2主体部出土鉄製品実測図 (S=1:2)	23			

本 文 中 写 真

写真1	埴輪壺 (SX01) 出土状況	28	写真2	土坑中 (13層) 出土土師器	42
-----	-----------------	----	-----	-----------------	----

図 版 目 次

図版1	(上) 茶山遺跡 (古墳群) 調査前風景 (北東から)	(下) 茶山遺跡 (北側斜面) 調査前風景 (南から)
図版2	(上) 古墳群等完掘状況 (北東から)	(下) 北側土坑群等完掘状況 (西から)
図版3	(上) 1号墳完掘状況 (西から)	(下) 1号墳墳丘検出状況 (西から)
図版4	(上) 1号墳a-a'の地山削り出しと周溝土層堆積状況 (東から)	(下) 1号墳東側周溝遺物出土状況 (東上から)
図版5	(上) 1号墳主体部短軸土層断面 (南から)	(下) 1号墳主体部長軸土層断面 (南東から)
図版6	(上) 1号墳主体部棺床検出状況 (北から)	(下) 1号墳主体部完掘状況 (北から)
図版7	(上) 1号墳主体部の石とヤリガナの出土状況 (東から)	(下) 1号墳主体部の鉄斧出土状況 (北から)
図版8	(上) 2号墳完掘状況 (東から)	(下) 2号墳東側周溝の土層堆積状況 (東から)
図版9	(上) 2号墳北側墳裾の地山削り出し状況 (東から)	(下) 2号墳東側周溝遺物出土状況 (東から)
図版10	(上) 2号墳第1主体部平面プラン検出状況 (東から)	(下) 2号墳第1主体部完掘状況 (東から)
図版11	(上) 2号墳第1主体部短軸土層断面 (南東から)	(下) 2号墳第1主体部長軸土層断面 (南東から)
図版12	(上) 2号墳第2主体部調査状況 (東から)	(下) 2号墳第3主体部断面と標石 (南から)
図版13	(上) 2号墳第3主体部短・長軸土層堆積状況 (北東から)	(下) 2号墳第3主体部完掘状況 (東から)
図版14	(上) 近世墓1の石出土状況 (北から)	(下) 近世墓1底部の遺物出土状況 (北から)
図版15	(上) 近世墓2検出状況 (西から)	(下) SX02 セクション (南から)
図版16	(上) SX04セクション (北西から)	(下) T7調査区 (3号墳主体部) 完掘状況 (北東から)
図版17	(上) 3号墳主体部検出状況 (南から)	(下) 3号墳主体部棺内土層堆積状況 (南東から)
図版18	(上) T8調査区完掘状況 (南西から)	(下) 3号墳墳頂部の土層堆積状況 (北西から)
図版19	出土遺物	
図版20	出土遺物	

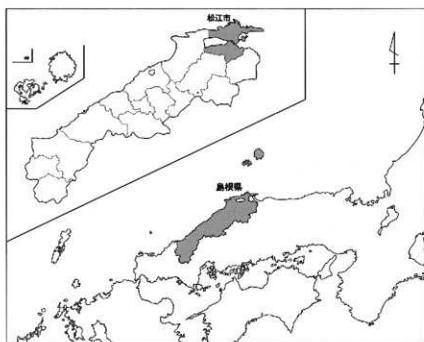
第1章 調査に至る経緯

平成25年8月、事業者から計画中の宅地造成工事区域における埋蔵文化財の有無について、松江市文化財課（平成26年4月からまちづくり文化財課）へ照会があった。これを受け、同年9～10月に当該開発区域において試掘調査を実施したところ、その一部で古墳等が確認された。これにより同年10月付けで土地所有者から遺跡発見の届出がなされ、当該開発区域の一部が「茶山遺跡」として周知されることとなった。

その後、開発事業者と遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、遺跡を外しての開発は困難であるとの結論に至り、平成26年5月に文化財保護法第93条に基づく発掘の届出が提出された。これを受け、鳥根県文化財課と協議した結果、当該遺跡について発掘調査の指示がなされることとなり、同年6月、現地調査（「第3章 茶山遺跡（南側）の調査」として報告するもの）を実施するに至った。

一方、現地調査開始直後、今回の開発範囲を北東側に一部拡張したい旨、同事業者から協議があった。これを受け、一部削平により旧地形を留めない部分を除き、基本的に未調査地であったため、その拡張予定範囲について松江市まちづくり文化財課によって、平成26年6月に追加の試掘調査を実施することとなった。その結果、北東側の拡張予定範囲の一部に古墳1基（茶山3号墳）が削平を受けながらも残存することが判明し、茶山遺跡の広がり確認されることとなった。このことから、事業者と当該古墳の取扱いについて協議を行ったところ、改めて発見された古墳の範囲については、造成範囲から除外することとし、現状を基本的に改変することなく緑地として残すこととなった。

以上の経過をもち、茶山1・2号墳を含む遺跡南側は本発掘調査を平成26年6月～8月に実施し、同年11月に鳥根県教育委員会と協議のうえ記録保存の措置が取られることとなり、また、北側の茶山3号墳については、現地に保存されることとなった。



第1図 鳥根県・松江市位置図

第2章 位置と歴史的環境

1. 位置 (第2図)

茶山遺跡は島根県浜乃木四丁目896番外に所在する。

当地は、JR松江駅より1駅下った、JR乃木駅の南東約300mに位置している。

宍道湖東岸にある独立丘陵の西側にあたり、西方には宍道湖と周辺の山並みを広く見わたすことができる、とても見晴らしの良い場所である。現在では宍道湖岸や忌部川河口が埋め立てられて市街地化されているが、かつては丘陵のすぐ近くまで汀線がせまる場所であった。

地理的にみると、当遺跡は乃木段丘の西端に位置している。乃木段丘は標高15～30mの微高地が広がる地形で、北は床几山まで続き、その先は宍道低地帯となり、砂州から発達して近世には埋め立てもおこなわれた松江藩の城下町に至る。乃木段丘の東は意宇平野の手前にまでおよび、広範囲にわたって凹凸のある微高地が広がっている。また、当遺跡の南には忌部川の氾濫原の低地があり、南西は標高25～40mの乃白段丘となっている。

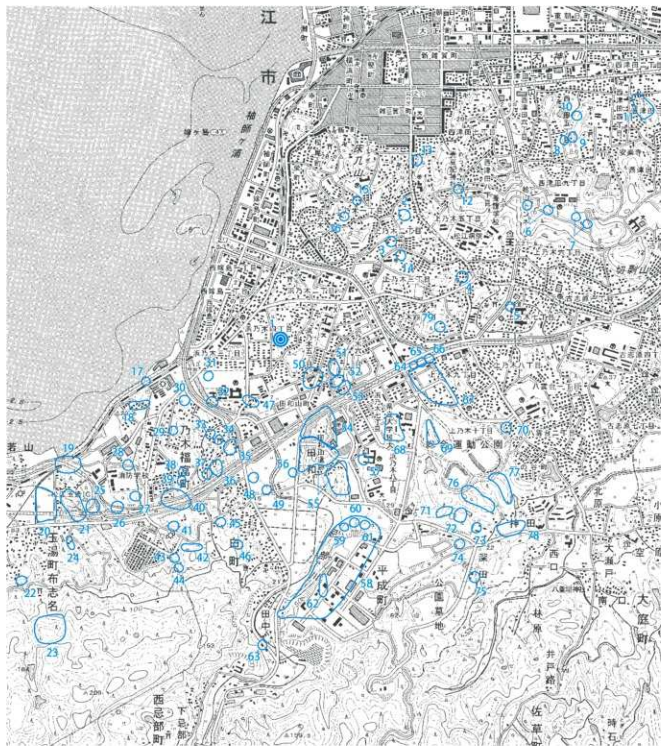
2. 歴史的環境 (第2図)

旧石器時代 廻田遺跡 (29) から玉髓製のナイフ形石器が出土しているほか、田和山遺跡 (54) から玉髓製のナイフ形石器、台形礫石器、楔形石器のほか碧玉製の縦長剥片が出土している。

縄文時代 福富 I 遺跡 (36) から落とし穴18基が検出され、有舌尖頭器を含む草創期～早期の黒曜石製石器が出土している。長廻遺跡 (79) では落とし穴4基が検出されている。浜乃木周辺で知られる遺跡数は少ないが、門田遺跡 (32) から晩期の突帯文土器が出土しているので、未だ認識されていない遺跡が存在すると思われる。

弥生時代 欠田遺跡 (31) は前期から後期にわたる遺跡で、石斧、大型石包丁、石鎌、多量の土器片が出土している。門田遺跡 (32) は狭いながらも前期から後期にわたる遺跡で、中期の遺物として分銅型土製品2点が出土している。田和山遺跡 (54) は前期末から中器にかけての遺跡で、狭い丘陵頂部を中心に三重の環壕が廻らされており、環壕の中から中細型銅剣を模した磨製石剣のほか、環状石斧や多数の石鎌、土器、つぶて石などが出土している。福富 I 遺跡 (36) では1区から鎌や田下駄など水稲耕作をうかがわせる木製品が出土している。雲垣遺跡 (48) は中期の土器と田下駄が出土したほか、木鎌が出土している。友田墳墓群 (52) は中期中葉から後期前葉にかけての遺跡で、1つの丘陵上に土壇墓群、墳丘墓群、四隅突出型墳丘墓の3種類の墳墓が造られていることを特徴とする。このうち6基の墳丘墓は中期中葉に築かれていることから、田和山遺跡との関連性が指摘されている。東城ノ前遺跡 (11) は後期の貼石墓4基から成るもので、うち2基は四隅突出型墳丘墓と推定されている。

古墳時代 前期の古墳としては袋尻遺跡群 (58) の4、7、8号墳があり、茶山遺跡の南1.3kmに位置している。4号墳は墳形と規模が明確にされていないが、6×11m前後の長方形墳のように見える。主体部には自然石が使用されているが、詳細は明らかでない。墳頂と墳裾には合わせ口の土器棺が埋納されており、墳頂の土器棺からは鉄剣1点が出土している。7号墳は一辺12mの方墳



- | | | | | |
|------------|--------------|------------------|-----------|------------|
| 1 茶山遺跡 | 17 福富遺跡 | 33 野所遺跡 | 49 乃白遺跡 | 65 乃木二子塚古墳 |
| 2 宇賀I遺跡 | 18 二名塚古墳群 | 34 漢馬塚遺跡 | 50 二ツ崎手遺跡 | 66 下沢遺跡 |
| 3 宇賀II遺跡 | 19 布志名大谷I遺跡 | 35 松本遺跡 | 51 向原古墳群 | 67 長砂古墳群 |
| 4 経塚古墳 | 20 虎野目遺跡 | 36 福富I遺跡 | 52 友田遺跡 | 68 奥山遺跡 |
| 5 向原古墳群 | 21 布志名大谷II遺跡 | 37 乃白玉手跡 | 53 南谷田遺跡 | 69 奥山古墳群 |
| 6 鹿倉古墳群 | 22 小川古墳群 | 38 森本谷古墳 | 54 田和山遺跡 | 70 矢の原遺跡 |
| 7 室跡古墳群 | 23 井原古墳群 | 39 野所古墳群 | 55 田和山古墳群 | 71 熊倉谷遺跡 |
| 8 浅井横穴群 | 24 判官山古墳群 | 40 松本古墳群 | 56 藤原遺跡 | 72 櫻松遺跡 |
| 9 小沢横穴群 | 25 布志名大谷I遺跡 | 41 松本古墳 | 57 藤友田古墳 | 73 栗田遺跡 |
| 10 樋ノ原古墳群 | 26 布志名字の神遺跡 | 42 羽村横穴群 | 58 藤原遺跡 | 74 熊倉谷古墳群 |
| 11 栗城ノ原遺跡 | 27 大角山古墳群 | 43 松本横穴群 | 59 野向古墳 | 75 小倉見谷横穴群 |
| 12 糠山古墳群 | 28 大角山遺跡 | 44 岩塚口古墳 | 60 寛次遺跡 | 76 赤ヶ谷遺跡 |
| 13 西ノ原遺跡 | 29 扇田遺跡 | 45 熊倉野原穴群 熊倉野古墳群 | 61 大久保古墳群 | 77 神田遺跡 |
| 14 藤原遺跡 | 30 神立遺跡 | 46 乃白権左遺跡 | 62 寛次横穴群 | 78 松ヶ谷遺跡 |
| 15 鹿沙門山古墳群 | 31 欠田遺跡 | 47 福富II遺跡 | 63 塚田遺跡 | 79 長尾遺跡 |
| 16 荒神古墳 | 32 門田遺跡 | 48 宮垣遺跡 | 64 二子塚古墳 | |

第2図 茶山遺跡と周辺の遺跡 (S=1:25000)

である。主体部は墳頂に2つあり、第1主体部は2段掘り墓壇で、内坑には粘土が敷かれ横断面はU字形をしている。第1主体部を切って造られた第2主体部は素掘りで、床面に敷かれた粘土の横断面はU字形をしている。副葬品は出土していない。8号墳は約14mの円墳である。主体部は素掘りで、底には平坦に粘土が敷かれており箱形木棺の埋納が考えられている。墳頂には合わせ口の土器棺が検出されている。副葬品は出土していない。

中期になると全長61.4mの前方後円墳、大角山1号墳(27)が築かれている。二段築成で葺石を持ち、円筒埴輪が出土している。二名留古墳群(18)のうち、2号墳は13.5×11mの方墳で、手持勾玉1点と白玉538点が出土している。長砂古墳群(67)は中期後半の古墳群で、一辺10m前後の16基の方墳で構成される群集墳である。短期間のうちに造られた古墳群で、古式須恵器と多くの鉄製品が副葬されていた。

後期前半には全長36mの前方後方墳、乃木二子塚古墳(65)が築かれている。長砂古墳群の後継者が勢力を拡大して築いた古墳ではないかと考えられている。後期後半には全長20mの前方後円墳、田和山1号墳(55)が築かれている。横穴式石室の中から多くの須恵器と鉄製品が出土している。屋形1号墳(33)は一辺8m前後の方墳で、埋葬主体に横穴式木室を持つ出雲地域唯一の特異な古墳として知られている。このころになると、主要な古墳は松江市東部の茶臼山山麓や意宇平野周辺を中心とした地域に多く築かれるようになり、浜乃木周辺では菅沢谷横穴墓群(62)や袋尻横穴墓群(58)、弥陀原横穴墓群(42)、松本横穴墓群(43)、奥山横穴墓群(69)など小規模な埋葬施設が多く分布している。

生産遺跡としては瑪瑙の原石を産出する花仙山を背景に、玉作遺跡が多くみられる。中期には大角山遺跡(28)で5棟の竪穴式住居から碧玉製勾玉や管玉未成品、玉砥石のほか、多数の石屑が出土している。田和山A遺跡(54)もほぼ同時期の遺跡で、竪穴住居跡1棟から勾玉や管玉未成品、多数の石屑が出土している。福富I遺跡(36)は中期末から後期にかけて、加工段を伴う掘立柱建物跡周辺から多数の勾玉や管玉の未製品や石屑が出土している。

奈良平安時代 松本古墳群(40)や才の神遺跡(26)では、古代道路の痕跡が確認されている。奈良時代の地誌「出雲国風土記」に記された「真西道」との関連が注目されている。

参考資料 松江市史編纂委員会『松江市史 史料編2考古資料』2012年

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『袋尻遺跡群』

第3章 茶山遺跡（南側）の調査

第1節 調査の概要

1. 調査前の状況（第4図）

本発掘調査の対象となった遺跡南側調査区の竹木を伐採したところ、最も高い場所は北東隅で標高20mである。西に下がる緩傾斜地では南北約20mにわたって法面カットがおこなわれ、西に面した平坦地が造成されており、その標高は17.5m前後である。平坦地の東端中央に井戸1基が残っていたので、時期は分からないが、かつて宅地として利用されていたようである。平坦地の西端には約1m下がる崖があり、その下には東西に長い標高15.5～16.5mの畑が残っていた。宅地や畑からは、西へ下がる道が通されており、この道や下方の宅地造成のために調査区の南端丘陵の西側北斜面は大きく削り取られ、一部では地山が露出してオーバーハングしていた。

さらに調査地の南東に接している場所（調査地外）にも東西約18mにわたって法面カットがおこなわれ、南に面した平坦地が造られており、その標高は17m前後である。時期は分からないが、片隅に瓦が積まれていたことから、ここも宅地として利用されていたようである。

2か所に造成された平坦地の間には、幅2mの土橋状地形がみられた。これは、地元の人のお話によれば、西の丘陵尾根上を北寄りに続いて延びていた道の跡とのことで、いつから使用されていたのかは不明だが、第二次世界大戦ころには大庭町にあった練兵場と玉造温泉を結ぶ道として利用されていたそうである。

以上のとおり、茶山遺跡調査地の大半は後世の土地利用によって大きく改変を受けていた。

2. 調査の概要（第4、5図）

本調査は、茶山遺跡のうち、開発対象となった南側調査区763㎡について実施した。

まず、25cmコンタで調査前の地形測量図を作成し、調査区に5mグリッドを設定した。ここでのグリッドとは、国土座標 $X = -61345$ と $Y = 80275$ の交点を基点として、①南へ5mピッチでアルファベット（A、B、C、…）、②東へ5mピッチでアラビア数字（1、2、3、…）与えたもので、グリッド名はアルファベットの後にアラビア数字を組み合わせて呼称した。例えば、第4図の☆印グリッドはH9区である。遺構に伴わない遺物はグリッドごとに取り上げた。

本調査範囲は、地形上から北側の緩斜面と南西の丘陵尾根上に分かれ、それぞれ調査方法や検出された遺構の性格が異なることから、本書では前者を「北側土坑群等」、後者を「茶山古墳群等」として報告する。

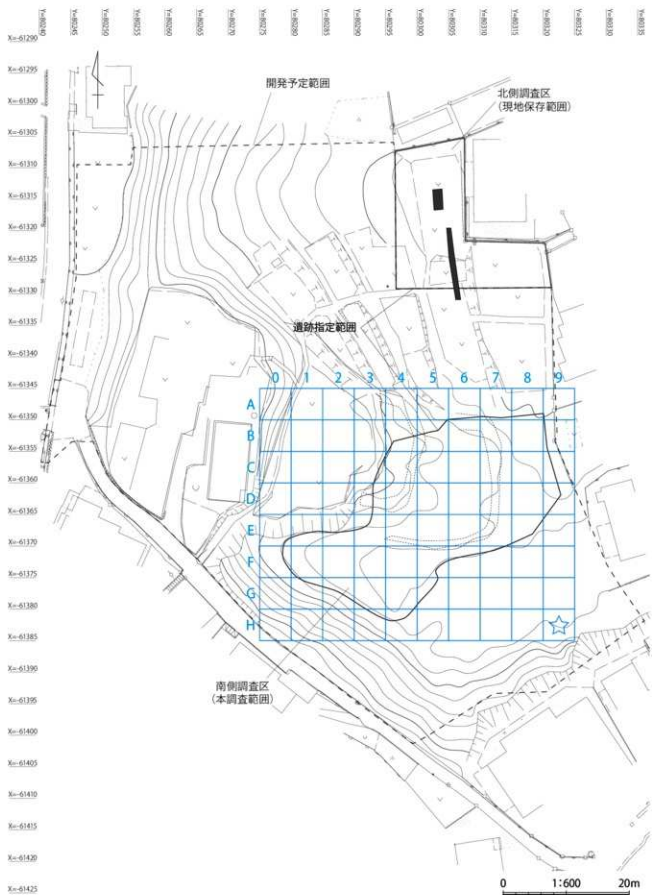
掘削は北側土坑群等から開始した。最も標高が高い北東の隅から掘り始め、西へ下がる緩斜面を順次下って精査を繰り返した。この斜面の試掘結果では遺構面までの深さが1.6mあったので、表土や遺物を含まない堆積層は重機で除去し、遺構面上5～10cmを人力で掘削した。もちろん、重機掘削の時も遺物や土層変化に注視していたが、現代の遺物も含めて遺物はほとんど出土しなかった。遺構としては、性格不明の遺構10基、土坑15基、加工段2か所が検出され、遺物は石材片（玉髓）3点が出土した。そのほか、調査範囲外ではあるが、北側傾斜地の東に隣接する道で須恵器2片を表採した。

次に古墳群等の調査に入った。ここは試掘調査の段階で古墳が存在することが分かっていたので、基本的には人力で掘削をおこなった。浅い表土の下には孟宗竹の地下茎が縦横無尽にのびており、調査を困難にするとともに、遺構にもダメージを与えていた。遺構としては古墳2基のほか、近世墓2基と埋納壺1個が検出された。遺物は石材片（玉髄）2点、土器（須恵器・土師器・陶磁器）コンテナ4箱、鉄製品6点、古銭1点が出土した。

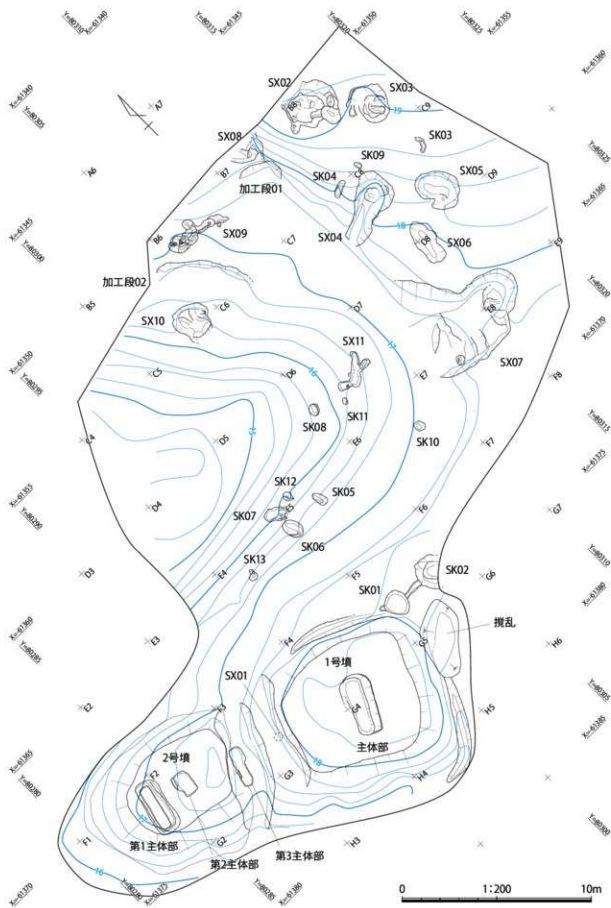
また、松江市教育委員会は、本調査と並行して北側調査区で2か所のトレンチ調査を実施した。その結果、朱が敷き詰められた埋葬主体の一部分と、それに伴う墳丘の墳裾の位置を確認したことから、これを「茶山3号墳」とした（第4章で報告するもの）。



第3図 茶山遺跡位置図 (S=1:5000)



第4図 茶山遺跡調査範囲とグリッド設定図 (S=1:600)



第5図 茶山遺跡(南側)遺構配置圖 (S=1:200)

第2節 古墳群等の調査

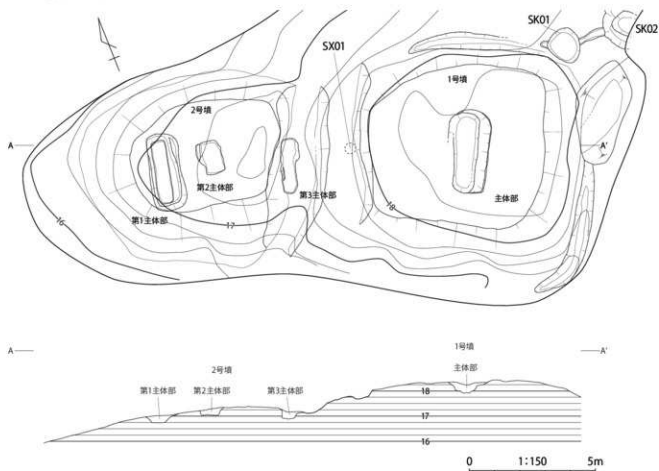
1. 遺構の配置と概要

古墳群は茶山遺跡の南西丘陵の尾根上に立地する。

この尾根は東から西に緩やかに下がっているが、東側は削平を受けて平坦地となり、西側は大きく削られて丘陵自体が消滅し、古墳群が築造された部分だけがかろうじて旧状を保ち、東に標高18.5m、西に標高17.5mの2つのわずかな高まりがみられた。

試掘調査で掘削された3か所のトレンチでは、西の高所と東の高所に主体部の断面が観察でき、その間には明らかに周溝と考えられる黒色土の弧状堆積が観察されたことから、2基の古墳が存在することが想定された。そこで、尾根の中央を貫く東西方向に畦を設定し、墳頂と考えられる2か所から主体部を避ける位置で、東西畦と直交する南北畦2本を設定した。まず東西畦の南側にトレンチを掘って土層を観察したところ、尾根上には東西に2基の古墳がならぶことが判明したので、東から1号墳、2号墳と呼称した(第6図)。

古墳群の周辺では、1号墳の北東で近世墓2基(SK01、02)と、1号墳西側墳頂で埋納壺1個(SX01)を検出した。



第6図 古墳群平面図と断面図 (S=1:150)

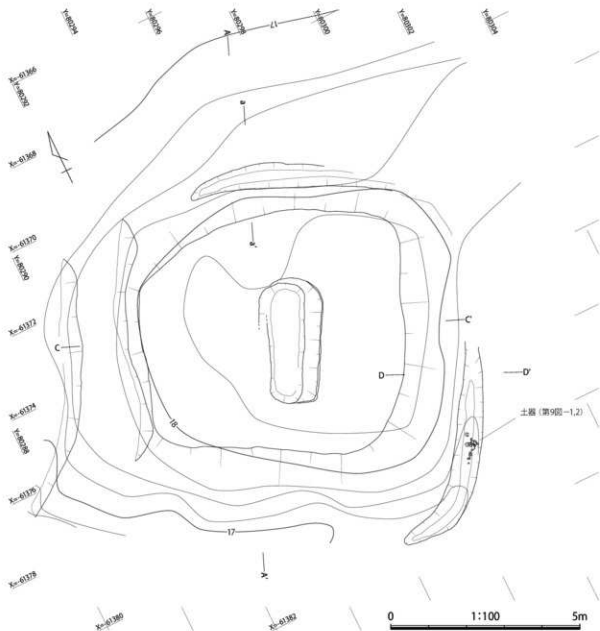
2. 茶山1号墳の調査

(1) 墳丘と周溝

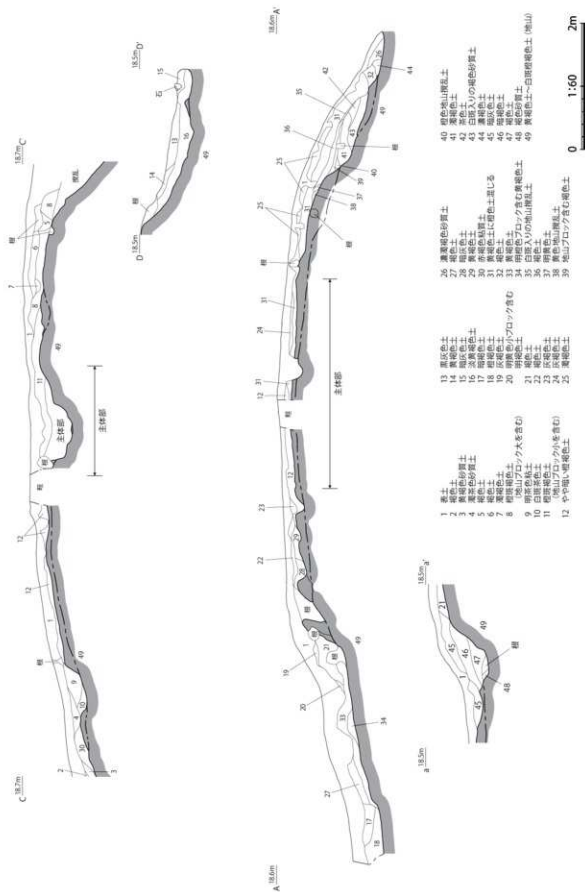
墳丘規模・形態(第7図) 墳丘規模は東西9m、南北8mで、墳形は東西方向が1m長い長方形である。墳丘の高さは北及び西辺の墳裾から0.6m、東及び南辺墳裾から0.6~1.0mで、墳頂平坦面は東西7m、南北6.6mを測り、標高18.25mで平坦に整えられていた。

なお、墳丘に葺石は認められなかった。

墳丘の築成(第8図) セクションa-a'で北辺をみると、地山の削り出しによって墳丘が造られ、その北側は緩斜面のテラスとされており、墳裾には幅0.6mの断面U字状の周溝がみられた。セクションA-A'で南辺をみると、ここも地山の削り出しがみられた。東辺はやや南寄りのセクションD-D'



第7図 茶山1号墳 (S=1:100)



第8図 1号墳墳丘セクション (S=1:60)

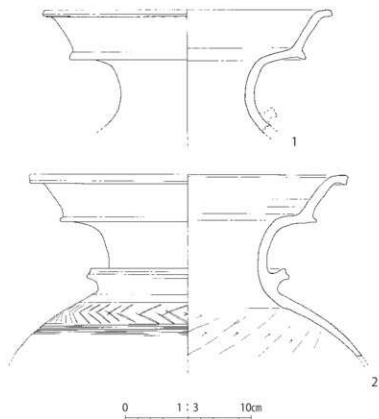
でみると、地山の削り出しで、墳裾には幅約1mの浅い周溝がみられた。セクションC'-C''で西辺をみると、9、10層がわずかに地山を切っていることから、地山の削り出しと判断され、西方へは緩斜面のテラスがみられた。以上のことから、墳丘は地山の削り出しにより成形されたものである。

なお、西辺に造られたテラスの東西幅は2m程度で、その先には2号墳の周溝が掘られている。

周溝 (第7・8図) 北辺の中央より東側では上端幅0.6m、下端幅0.4m、深さ0.1mの断面U字状の周溝を検出した(第8図a-a')。北東隅は後世の攪乱で失われているため不明であるが、東辺の中央から南にかけては幅0.6~1m、深さ0.15m程度の非常に緩やかなU字状の周溝があり、周溝の標高は南にいくにつれて低くなり、東南隅では西へ曲がって、南辺にも約1m続いていた。

遺物出土状況(第7図) 東辺周溝の中央よりもやや南側から土師器の壺が出土した。壺は2個体あり、1つは口縁から肩部にかけてほぼ完存するもので、口縁を北に向けて地山直上から出土した(第8図2)。墳頂にあったものが早い時期に転落したものと思われるが、肩部より下は全く出土していない。もう1点は口縁の小破片が1片だけ残るものである(第9図1)。同じ土器溜りから出土したもののだが、出土位置は確認できなかった。

出土遺物(第9図) 1は口縁から頸のにかけての一部が残存する土師器の壺である。大きく外反する複合口縁を持ち、口縁端部には幅0.5cmの平坦面があり、下段の突出は0.3cm前後を測る。風化のため



第9図 1号墳周溝出土遺物実測図 (S=1:3)

調整は分かりにくい、内外面とも頸より上は横ナデと思われる。頸の下方には突帯が剥離した痕跡が残る。胎土には1mm弱の石英、長石粒を若干含み、焼成は良好、淡褐色を呈している。口径22.6cm、頸径10cm。2は口縁から肩部が残る土師器の壺で、プロポーションは1に近似しているが、やや径が大きく器壁が厚い。大きく外反する複合口縁を持ち、口縁端部には幅0.7cmの平坦面があり、下段の突出は0.3cm前後を測る。頸の付け根には端部幅0.9cmの突帯がめぐる。頸より上は内外面とも丁寧な横ナデ、肩部は丁寧なナデを施した後にヘラ描きの綾杉文、その下には4～6条の浅い凹線からなる櫛描き文がめぐらされている。肩部の内面は右上がりのヘラケズリである。胎土には1mm弱の石英と長石粒を多めに含み、焼成は良好、明淡褐色～橙色を呈している。口径25.3cm、頸径12.6cm。

(2) 埋葬施設

主体部 (第10・11図) 墳頂平坦部のほぼ中央で、尾根方向に直交する主体部を1つ検出した。

2段掘り墓塚で、主軸はN-25.5°-E (座標軸による。以下、主体部軸はそれによる) にとる。

外坑は検出面での平面プランは隅丸方形を呈し、規模は検出面上端で長軸3.3m、短軸1.7mである。西側の外坑は土が流出して失われている。外坑の壁は5cm程度垂直に下がり、外坑下端から内坑上端までのテラス幅は40cmで、テラスは中心に向かって緩やかに下がるため、外坑の最深は20cm前後である。

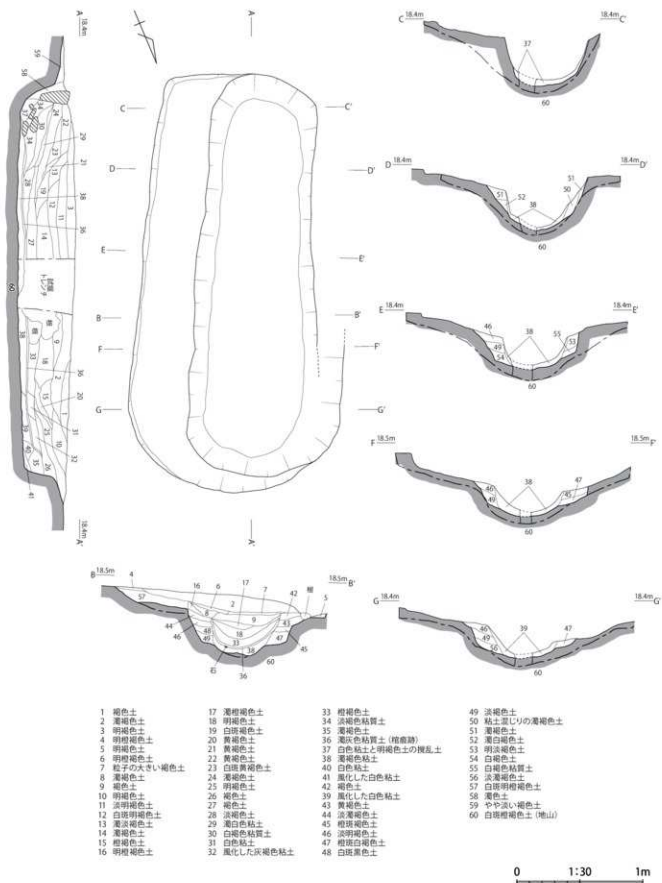
内坑は南端での上端が外坑上端と重なり、規模は長軸3.08m、短軸0.95m、深さ0.34mである。内坑断面はU字状で、長軸に直交して5本の葎ち割りをおこなったところ、南側A地点では東西幅67cm、深さ38cmに対し、E地点では東西幅90cm、深さ29cmで、北側ほど内坑の上端幅が広がり、深さは浅く造られていた。

墓塚内に棺は遺存していなかったが、短軸断面B-B'を見ると、木棺が腐朽して置換したと推測される濁灰色粘質土 (36層) があり、この層がU字状を呈していることから、舟底状の刳抜式木棺が納められていたと判断される。木棺の設置にあたっては、内坑の底部に濁褐色粘土 (38層) を敷き、木棺を納めた後に内坑と棺の隙間に裏込土 (8、16、42～49層) を入れている。

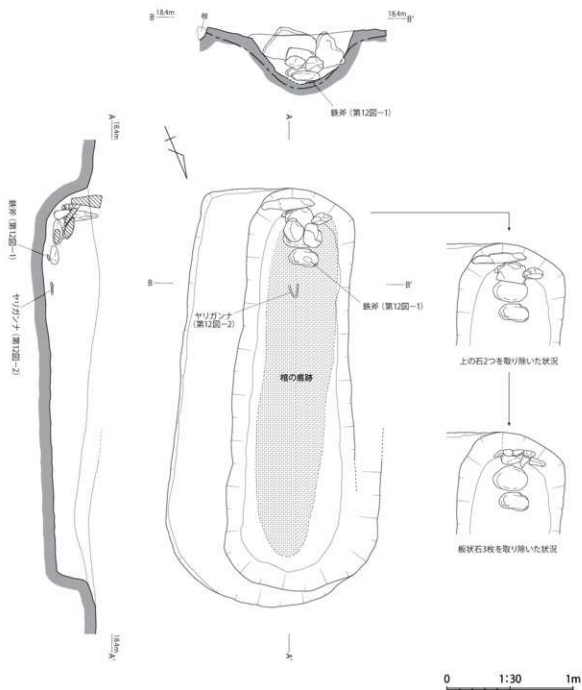
小口板の位置は平面では押さえることができなかった。長軸断面A-A'をみると、南側の小口は上層の北に下がる粘土 (29層) があり、その下の30、34層が棺痕跡 (36層) に向けて下がることから、29層の右端付近 (第10図A-A') にあった可能性が高いと考える。また、南端には小口板の裏込めに使用されたような石があるため、石の北側に小口板が据えられ、前記した場所には仕切り板が存在した可能性も指摘される。北の小口板の位置は、濁灰色粘質土 (36層) が若干立ち上がる付近と思われる。

棺の蓋の痕跡はわからないが、長軸セクションで南端の石から北へ下がる上層の濁白色粘土 (29層) は棺内流入土とは考えられないことから、棺の蓋を覆うものであったかもしれない。ただし、この粘土層はこれより北側ではみられない。

墓塚の南側では石が使用されていた。その出土状況は、南の壁近くに板状石2枚が平坦面を北 (棺の内側) に向けて立てられており、その北には北下がりの板状石が平坦面を上に向け、その上にはやや凹凸のある丸味を帯びた石2つが東西に並んでいた。また、北下がりの板状石の下から北にかけて



第10図 1号墳主体部実測図 (S=1:30)



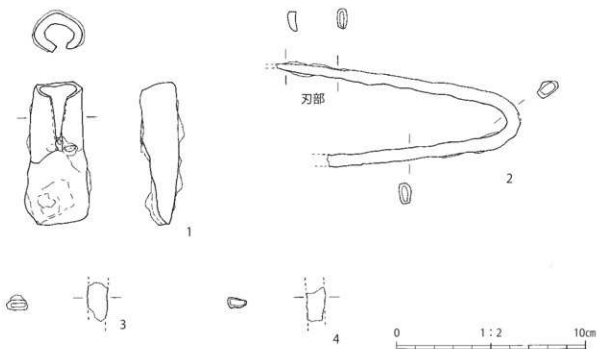
第11図 1号墳主体部の遺物、石出土状況図 (S=1:30)

は扁平で楕円形をした滑らかな石2つが長辺を接するように南北に並んでいた。北下がりの板状石の上にある2つの石を取り除くと、北下がりの板状石とその北にある楕円形の2つの石は中心軸がほぼ同じになるようにならんでいた。さらに、北下がりの板状石と立てられた板状石2つを取り除くと、南北に並んだ2つの楕円形の石の南にはさらにもう1つの丸味を帯びた石が現れ、その石の上には、形状に統一性のない小さめの石が東西方向に直線状に並んでいた。上記した石の内、最後に現れた丸味を帯びた石とその北に2つならんだ楕円形の石の下端は木棺の腐朽層と考えられる濁灰色粘質土に

若干埋まりこんでおり、最も北に位置する楕円形の石の北端だけがやや浮いた状況であった。また、各石の間にはほとんど流入土をかんでいなかったことから、これらの石は人為的に据えられたものがほぼ原位置を保っている可能性が考慮された。しかし、一番北に位置する楕円形の石の下から鉄斧が出土しており、小口板を支えた石が崩れた状況である可能性もまた考慮される状態であった。

遺物出土状況（第11図） 内坑から鉄製品が2点出土した。1つは小型の袋状鉄斧（第11図1）で、一番北に位置する丸石の下、かつ棺床面の直上から出土した。袋部は東、刃部は西に向き、前面が上を向いていたので柄は装着されていなかったと思われる。もう1つはヤリガンナ（第11図2）で、墓壇の南端から80cm北の位置で、木棺中軸上の棺の床面直上から出土した。柄の中央付近で「V」字状に曲げられた状態で出土しており、本来は完形であったと思われるが、調査時に両端を欠損してしまった。刃部と基部が南を向いて出土した。

出土遺物（第12図） 1は小型の袋状鉄斧で、袋部と刃部の境に張り出しの肩を持たず、刃部に向かって幅が広がるタイプのものである。完形で、全長9.5cm、袋部長4.2cm、刃部幅2.5cm。袋部は外径2.6×2.0cm、内径1.5×1.0cm。2はヤリガンナで、人為的に柄の中央付近から「V」字状に曲げられたものと考えられる。刃部幅が狭く、柄の長いタイプと思われる。刃部先端と基部を失っているため全長は不明だが、曲りを伸ばして復元した残存長は23.5cm程度、残存する刃部は幅1.0cm、厚さ0.4cm、柄の断面は長方形で幅1.0～1.1cm、厚さ0.5～0.6cm。3、4は形状から2に掲げたヤリガンナの一部ではないかと思われる。3は残存長2.0cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm。4は残存長1.4cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm。



第12図 1号墳出土鉄製品実測図 (S=1:2)

3. 茶山2号墳の調査

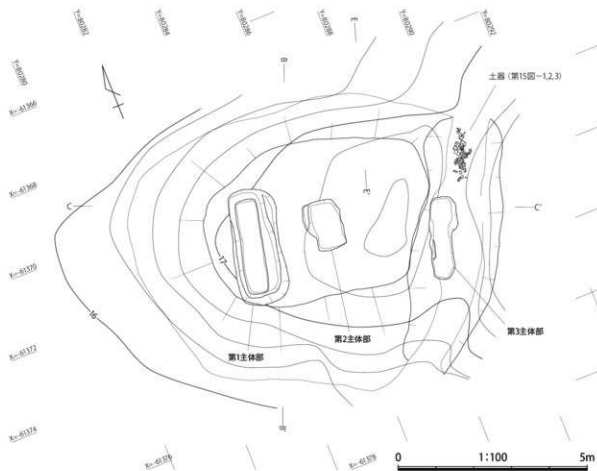
(1) 墳丘と周溝

墳丘規模・形態 (第13図) 2号墳の墳丘規模は東西9m、南北8mで、墳形は東西が長い長方形を呈するものと思われる。ただし、西側については墳丘の流失が著しく、西辺の墳裾は丸味を帯びていることから、本来はもう少し東西に長かったのかもしれない。墳丘の高さは北及び西、南辺の墳裾から1.2m、東側から0.6mを測る。墳頂平坦面の平面形は墳丘の形状に準じており、東西6m、南北4.5mを測り、墳端の標高は東辺で17.5m、西方に低くなり西端の標高は17.0mくらいである。

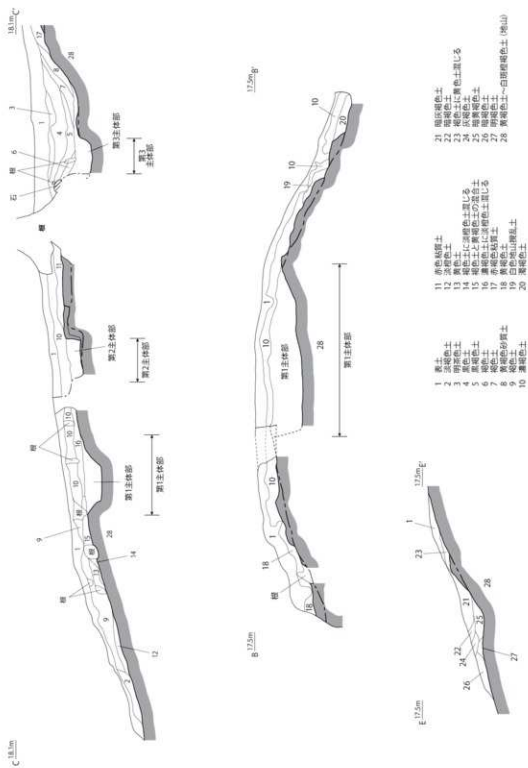
墳丘に葺石は認められない。

墳丘の築成 (第14図) 東辺は尾根を分断する上端幅約2mの直線状の溝を掘ることにより形成され、その断面はC-C'セクションで顕著である。北辺についてE-E'セクションをみると、地山の削り出しによる形成がみられる。西辺と南辺は墳丘の流出により、墳丘の築成状況が分からない状況となっている。ただ、人為的な削平を受けていなければ地山が大きく流失するとは考えにくいことから、盛土で成形されていた可能性が考えられる。

周溝 (第13・14図) 墳丘の東側には尾根と直交する方向に幅2m、深さ0.5mの溝が掘られており、この溝は浅くなりながらも北東隅で西へ曲がり、北辺に2m程度のびて消滅していた。また、東辺の



第13図 茶山2号墳 (S=1:100)

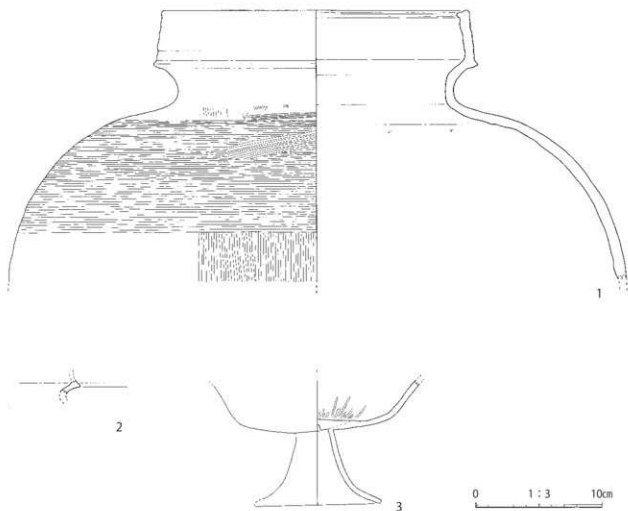


第14図 2号埴壇丘セクション (S=1:60)

周溝は南側では西にカーブしながら消滅しており、その主軸は墳丘上の第1、2主体部の主軸と大きく異なっていた。

周溝遺物出土状況（第13図） 東辺に沿って掘られた周溝の北側半分から土器が集中して出土した。そこは第3主体部の北端直上から北側にあたる。土器はすべて土師器で小さな風化した破片になっていたが、器種には甕、壺、高坏があり、それぞれ1個体が復元できる程度の破片量がみられた。土器片は黒色土の中から上方にかけて出土したので、もともとこの場所に据えられたものが割れたのではなく、おそらく墳丘上にあったものが転落して土器だまりになったものと思われる。

周溝出土遺物（第15図） 1は土師器の壺である。厚みのある複合口縁はやや内傾し、口縁端部には幅1cmの平坦面があり、下段の突出は0.3cm前後である。頸は短めで、肩部はよく張る。頸より上は内外面とも丁寧な横ナデで、肩部外面は幅の狭い縦ハケの後に横ハケをめぐらし、内面は横方向のヘラケズリが施されている。胎土には細かい石英と長石粒を多く含み、焼成は良好、淡褐色を呈し、部分的に黒斑がみられる。口径24.4cm、頸径21.8cm。2は土師器の甕である。同一個体と考えられる破片がまとまって出土したが、風化が著しいため接合できなかった。複合口縁の下段の破片からろうじて器種がわかったものである。胎土は緻密、焼成は不良、淡褐色、法量は不明。3は土師器の高坏



第15図 2号墳周溝出土遺物実測図（S=1:3）

である。坏底部は円盤充填技法によるもので、坏の立ち上がりは丸味を帯び、見込みには放射状の暗文が施されている。脚部の調整は器面剥離のため不明である。胎土は緻密、焼成は良好、赤褐色を呈している。脚底径10.0cm。

(2) 埋葬施設

主体部の配置 (第13図) 墳頂平坦面に西から第1主体部、第2主体部、東側周溝の中に第3主体部があり、合計3つの主体部が検出された。主体部の軸はいずれも尾根と直交する方向である。

①第1主体部 (第16・17図)

2段掘り墓壇で、主軸はN-13.1°-Eにとる。

外坑は検出面での平面プランが隅丸方形、規模は上端で長軸3.1m、短軸1.35mを測るが、西側の土が流失して外坑を失っているため、本来はもっと短軸方向に広がったと思われる。深さは9~11cmで、壁は内坑に斜めに下がるところが多く、東辺北側には幅10cm程度のテラスがみられる。

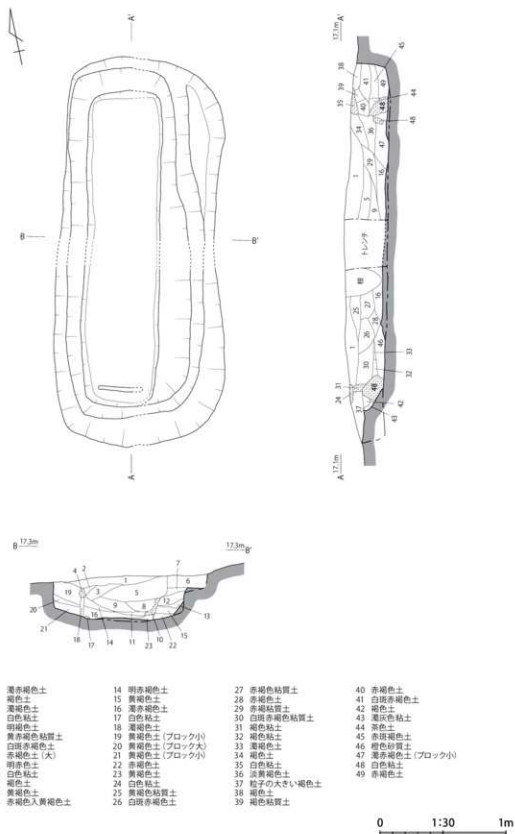
内坑規模は上端で長軸2.8m、短軸は0.8~0.98m、深さは0.2~0.24mである。下端は長軸2.9m、短軸は南端で0.81~0.94mを測り、南の方が広い。また、南辺は外坑、内坑とも壁の傾斜がとても緩やかに造られている。

墓壇内に棺は遺存していなかったが、短軸断面B-B'では木棺が腐朽したと考えられる濁褐色土(18層)と棺の形状を示すと考えられる逆L字状の白色粘土(10層)がみられ、長軸断面A-A'では小口板の裏込土と考えられる層(24、31、48、35、40、48層)の棺側がほぼ直線状であることから、棺は組合せ箱式木棺と判断した。さらに、墓壇内を標高20.07m(墓壇検出面)、16.97m、16.87m、16.82mと4回に分けて平面精査したところ、各精査面において、木棺の裏込土と木棺が腐朽した後に入り込んだ土の境界に明確なラインが存在していたので、これを裏付けるものである。棺の大きさは、外法で全長2.16m、幅0.56mである。

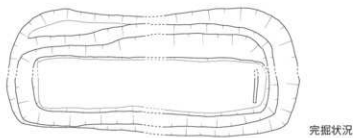
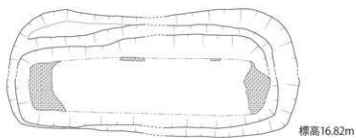
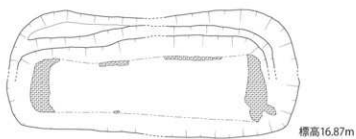
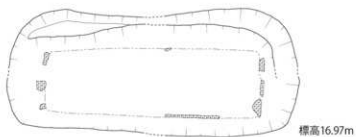
裏込土と棺内流入土の境には、側板が据えられたと考えられる位置で、幅2~4cmの帯状の白色粘土がところどころで観察された。上記したように墓壇内を4段回りに平面精査したところ、帯状の白色粘土は棺の裏込側ではなく、側板が据えられたと考えられる位置で検出されることがわかった。しかし、この帯状の白色粘土は上から下まで一貫して存在するわけではなく、精査面の高さによって使用されている場所が異なっていることから、幅の狭い側板が使用され、上下の接着、もしくは側板不足部分の穴埋めのような使われ方がされたと考えられる。

両小口の裏込には粘土が多用されている。また、南側ではちょうど小口板が据えられていたと思われる床面に、幅3cm、東西長24cm(東端は調査時のトレンチで切られている)、深さ1cm弱のくぼみが観察された。わずかなくぼみだが、小口板の圧痕の可能性が考えられる。

なお、遺物は出土しなかった。



第16図 2号墳第1主体部実測図(1) (S=1:30)



第17図 2号墳第1主体部実測図(2) (S=1:40)

②第2主体部（第18図）

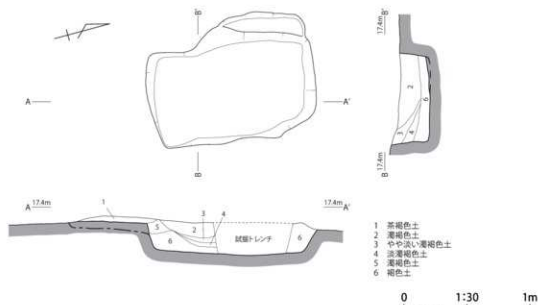
墳頂で第1主体部の東に位置し、尾根方向に直交する規模の小さい主体部である。試掘調査で確認されていたものである。

検出面での墓壇の平面プランは方形、西辺の北半分に南北1.2m、幅0.2m弱のテラスがみられるが、基本的には2段掘りとは思われない。主軸はN-39°-Eにとる。

規模は検出面上端で長軸1.35m、短軸0.75m～1.0m。壁はほぼ垂直に下がり、深さ24cm。下端は長軸1.2m、短軸72cmである。

短軸断面B-B'をみると、床面と平行した層（6層）の上に西下りの層（3、4層）があり、長軸断面A-A'では6層の南端が若干上がり、その上に緩やかに下がる層（2、3、4層）が確認されたが、棺の存在を示す明確な層はみられなかった。

出土遺物（第19図） 墓壇埋土を篩にかけてところ、鉄製品の破片が2点出土した。1は断面長方形の細長い破片で、両端を欠損しているため、製品名は不明である。一部に木質がみられる。幅1cm、厚さ0.4cm。2は両端を欠損するが、図の上部では右側に刃がつき、両面の一部に木質がみられることから、刀子の一部と思われる。刃部幅1.1cm、厚さ0.28cm。



第18図 2号墳第2主体部実測図（S=1：30）



第19図 2号墳第2主体部出土鉄製品実測図（S=1：2）

③第3主体部（第19図）

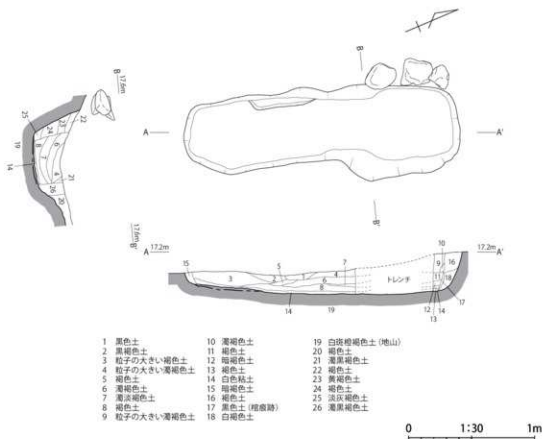
墳丘東辺の周溝の底に位置する、尾根方向に直交する主体部である。

主体部北側の西御墳端部には20cm程度の平らな石が3つ南北にならんでいる。周溝に堆積した黒色土の端は石列の上であり、墳丘周辺ではほかに石が出土していないこと、第3主体部の墓壇を掘ると落ちるような場所にありながら原位置を保っていることから、第3主体部の墓標のような性格であった可能性も考えられる。

墓壇の主軸はN-19.7°-Eにとる。墳丘を若干削り込み、周溝の中心よりもやや墳丘寄りに掘られているため、平面プランは墳丘の斜面から周溝の底にかけて検出された。平面プランは隅丸方形で、長軸2.39m、短軸0.56mである。深さは北側で0.3m、南側で0.22m、壁は垂直よりもやや緩く下がり、下端は長軸2.08m、短軸0.5mを測る。

墓壇内に棺は遺存していなかったが、長軸断面A-A'で木棺が腐朽した黒色土（17層）が観察されたほか、裏込土（15、16、18層）と棺内流入土（1～13層）の境界が明瞭である。また、短軸断面B-B'でも裏込土（22～26層）と棺内流入土（4、6～8、21層）の境界が明瞭であることから、組合せ箱式木棺が納められていたと推測される。木棺が据えられた場所の地山直上には粘土（14層）が薄く敷かれていた。

なお、遺物は出土していない。



第20図 2号墳第3主体部実測図 (S=1:30)

4. 近世の遺構

近世墓2基と埋納壺1個を検出した。近世における一連の埋葬関連遺構と考えられる。

(1) 近世墓1 (SK01) (第21図)

1号墳の北方平坦面に位置する。墓標は無い。

検出面の平面プランは円形で、直径1.17～1.34m、深さ0.7mである。壁は垂直に近く、底は平坦な円形で、下端直径0.94～1.04mを測る。棺の痕跡は残っていなかったが、墓壙の形状から桶棺が納められていたと思われる。

墓壙内の状況は、締まりのない暗灰色系の土(1、2層)が入り込んでおり、地山面の下40～60cmでは高い密度で石が出土した。石は全て自然石で、表面がごつごつしたものから滑らかなものまであり、大きさは10cm前後のものが多く、20cmを超えるものも混じっていた。性格は不明である。

墓壙の底には直径0.82～0.91mの円形に黒色土が広がり、南側の一部では特に濃い黒色をした暗黒色土がみられた。この変色部分は、桶棺が置かれた跡で、棺材や遺体などの有機質を反映するものと考えられ、暗黒色土については特に有機質の密度が高かった部分と解釈される。

底の暗褐色土直上からは陶器の茶碗が1点出土した。割れていたが、故意に割られた状況ではない。そのほかに、暗黒色土の南端あたりから甕斗瓦の小さな破片3点出土した。

出土遺物 第23図は大振り陶器碗である。当地において「ぼてぼて茶碗」と呼ばれるタイプのものであり、内外面には暗褐色の釉薬が掛けられており、高台周辺は露胎である。見込みには茶筌の痕跡が顕著に残されている。口径11cm、高台径4.9cm、器高8.4cm。松江近郊で焼かれた在地のものと思われるが、窯は特定できない。松江城下町遺跡では18世紀後半から19世紀代の肥前系磁器と共に廃棄されている資料が多い。

(2) 近世墓2 (SK02) (第22図)

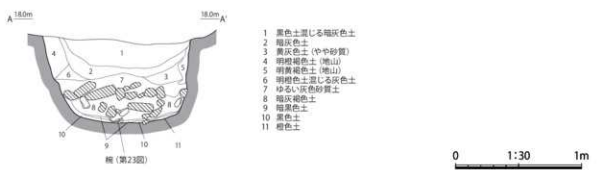
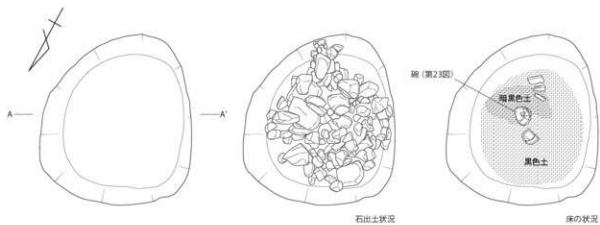
近世墓1の北東2mの地点にあり、半分は調査区外に位置している。墓標は無い。埋土等がSK01に近似しているので、近世の桶棺墓と判断する。

検出面での平面プランは半円形だが、円形に復元されるもので、直径1.86m、深さ0.51mである。壁は緩やかな傾斜で下がり、底断面は若干U字状で、下端直径0.94mを測る。

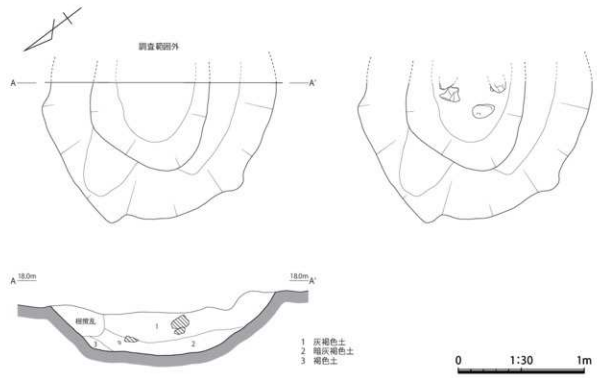
墓壙内の状況は、SK01に似た締まりのない灰褐色土が入り込んでおり、地山面下20～40cmで若干の石が出土した。石には表面がごつごつしたものから滑らかなものまであり、大きさは10cm前後のものが多かったが、量はSK01ほど多くはなかった。石の性格は不明である。床面に棺の痕跡等はみられなかった。

この墓壙では、床面ではなく、石と一緒に陶磁器が破片となって出土した。茶碗1点はほぼ完形に復元できたが、そのほかは小さな破片ばかりである。

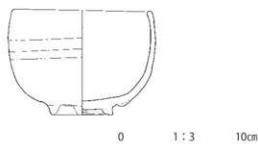
出土遺物 (第24図) 1は第22図と同様の大振り陶器碗である。内外面には暗褐色の釉薬が掛けられており、高台周辺は露胎である。口径10.5cm、高台径4.5cm、器高7.9cm。2は肥前系陶胎染付の碗。3は肥前系磁器の皿で、見込みには薄緑色に近い呉須で二条の線がめぐらされ、蛇の目刺しりが施されている。4は瀬戸美濃系陶器の碗もしくは鉢で、緑色の釉がかけられている。5は肥前系陶器の皿



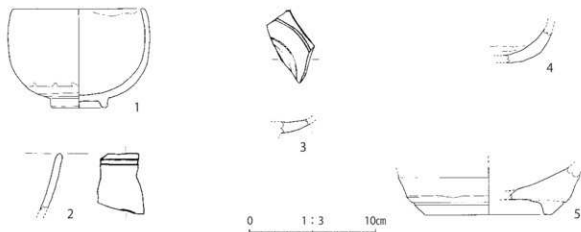
第21図 近世墓1 (SK01) 遺構実測図 (S=1:30)



第22図 近世墓2 (SK02) 遺構実測図 (S=1:30)



第23図 近世墓1 (SK01) 出土遺物実測図 (S=1:3)



第24図 近世墓2 (SK02) 出土遺物実測図 (S=1:3)

または鉢で、見込みは粗い刷毛目文様、外面は褐色の軸がかけておられ、高台周辺は露胎、底部は糸切り痕が残る。高台径10cm。1～5には若干の年代幅がみられるが、最も新しい1、3から、18世紀後半から19世紀代、江戸時代後期に取まる陶磁器である。

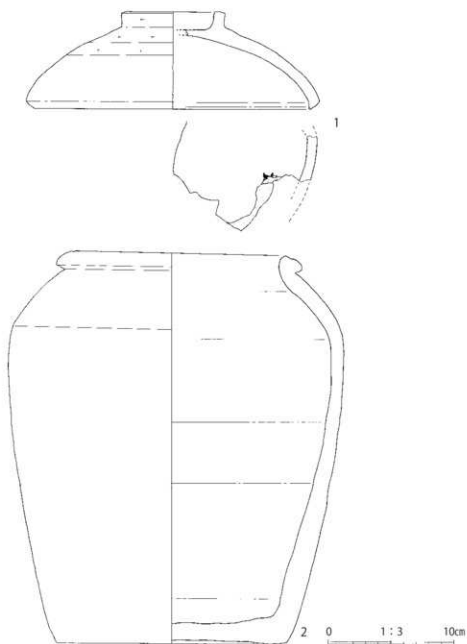
(3) 埋納壺 (SX01) (第25図、写真1)

試掘調査時に、1号墳の西側墳裾から蓋をされた壺が出土した。

壺には蓋がかぶせられ、口縁をやや上にして西向き状態で、地山直上から出土した(写真1)。壺の中から遺物は出土していない。埋納坑が存在したはずであるが、細かい竹根が多く検出できなかった。脆衣容器や埋葬容器などの可能性が考慮されるが、性格は判然としない。

出土遺物 第25図1は素焼の壺蓋で、削り出しの環状つまみが付く。そのほかについてはナデである。胎土は緻密で1mm前後の長石、石英粒を少々含み、焼成良好、内・外・断面とも明るい白褐色。口径21.8cm、器高7.7cm、つまみ径8.2cm。内面には墨書があり、半分以上を欠損しているが、「女」の右端の一部ではないかと思われる。2は素焼の壺で、口縁には玉縁がつき、肩部はやや張り底にかけては寸削なプロポーシオンで、外面はケズリ後ナデ、内面はナデ、底部はヘラによる調整である。胎土は緻密で1mm前後の長石、石英粒を少々含み、焼成良好、内外断面とも明るい白褐色をしている。口径19.4cm、胴部最大径26.5cm、底径18.1cm、器高30.9cm。

1と2は胎土と焼成、色調が近似しており、口径もちょうど噛み合うセット品である。時期は近世と思われる。



第25図 埋納壺 (SX01) 実測図 (S=1:3)



(北東から)



(北西から)

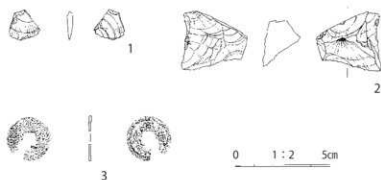
写真1 埋納壺 (SX01) 出土状況

4. 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は、石材片2点と古銭1点が出土した。

第26図1、2は石材片で、1はG4区表土直下から出土した玉髓の小さな剥片である。明赤褐色を呈し、縦1.6cm、幅1.6cm、最大厚0.3cm、重さ0.98gを測る。2はG4区表土直下から出土した玉髓の小石核で、両面に多数の打ち欠いた痕跡が残る。明赤褐色を呈し、縦3.2cm、幅3.4cm、最大厚1.73cm、重さ21.53gを測る。

3はE4区から出土した寛永通宝で、裏面は無文である。直径2.6cm、厚さ0.15cm。近世墓に関連する遺物と思われる。



第26図 遺構に伴わない遺物実測図 (S=1:2)

第3節 北側土坑群等の調査

1. 遺構の配置と概要

西に下がる緩斜面を精査して遺構の検出をおこなったところ、調査区東側の高い場所を中心として直径3mを超える性格不明の遺構10基を検出したほか、土坑15基、加工段2か所を検出した。遺構の配置には規則性がみられず、柱痕をとどめる遺構がないことから、建物構成する遺構とは考えられないものであった。

2. 層序

第27図に調査区北壁の土層を掲げた。東側は厚い表土層に覆われ、その下にわずかな褐色土を挟み、その下が黄褐色土の地山（遺構面）である。ここは北へ高くなる地形の緩斜面でもあるため、比較的地山が浅い。

しかし、北壁と茶山古墳群との中間あたりはかつての谷地形にあたるため、地山が深い。試掘調査で土坑SK08を検出したときの層序は、上から褐色土層（厚さ50cm）、黒褐色土層（厚さ45cm）、淡褐色土層（厚さ60cm）、黄褐色土層（地山）であり、遺構面の深さは表土下1.55mであった。谷の底部とその周辺では堆積土の厚さが全く異なるため、基本層序を一律に提示することはできない。

3. 遺構

(1) 性格不明の遺構（SX02～11）（第28～30図） 不整形で形状に意図があるとは思えない、比較的大きな坑を9基検出した。これらを性格不明の遺構としてSX02～SX11と称した。SX08 以外は、地山で検出されたもので、遺物は出土していない。

SX02（第28図） 調査区内の平面プランは不整形な円形であるが、調査区外の北へ続いているため全体の形状は不明である。規模は、調査区内では直径2.2～2.8m程度、最深1.6m。床面には凹凸がみられる。埋土は底の近くで細かく分層されたが、地山の土（黄褐色土）と黒色土が混じった層の範囲で取まり、強く締まっていた。

SX03（第28図） SX02の0.5m南東に位置する。平面プランは不整形な円形で、直径2.2m程度、最深0.9m。床面には凹凸がみられる。埋土はあまり細かく分層されないが、地山の土（黄褐色土）と黒色土が混じった層の範囲で取まり、強く締まっていた。

SX04（第28図） 平面プランは東西に長い不整形な楕円状で、長軸3.8m、短軸2.1m、最深1m。床面や壁面には凹凸がみられる。埋土は細かく分層されたが、地山の土（黄褐色土）と黒色土が混じった層の範囲で取まり、強く締まっていた。なお、西側の土層を見ると、層が中央に向かって下がっていることから、後世の宅地造成によって削平を受ける前までは、上端が存在していたと思われる。

SX05（第28図） 平面プランは不整形な楕円形で、径は2～2.4m、最深0.55m。底部は比較的滑らかで、埋土は褐色土系と灰褐色土系があり、強く締まっていた。

SX06（第29図） 平面プランは不整形な長い楕円形で、長軸2.5m、短軸1.5m、最深0.2m。底部は比較的滑らかであった。埋土は黒灰色土1層で、強く締まっていた。

SX07（第29図） 平面プランは西に大きく広がるU字形で、長軸6m、中心部での幅は3.4m、最深0.5m。床面や壁面には凹凸があり、埋土は細かく分層されたが、地山の土（黄褐色土）と黒色土



- 1 葦土・砂土
- 2 黄褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 赤土・砂土
- 9 赤土・砂土
- 10 赤土・砂土
- 11 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 12 暗褐色土
- 13 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 14 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 15 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 16 暗褐色土
- 17 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 18 赤褐色土
- 19 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 20 暗褐色土
- 21 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 22 暗褐色土
- 23 暗褐色土
- 24 暗褐色土
- 25 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 26 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 27 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 28 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 29 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 30 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 31 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 32 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 33 赤褐色土
- 34 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 35 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 36 暗褐色土と暗褐色土混じる
- 37 暗褐色土
- 38 暗褐色土
- 39 暗褐色土
- 40 暗褐色土
- 41 暗褐色土
- 42 暗褐色土
- 43 暗褐色土
- 44 暗褐色土
- 45 暗褐色土と暗褐色土混じる

第27図 北側斜面北壁セクション (S=1:60)

が混じった層の範疇で収まり、堅く締まっていた。

SX08 (第30図) 平面プランは不明であるが、北壁で西にオーバーハングした落ち込み状の土層を確認した。上層の黒灰色土が西の表土を切っているので新しい遺構である。下方の土層は黄灰色土系と黒灰色土系の薄い層が若干弓なりに堆積を重ねているが、土は最下層までふかふかとやわらかく、締まりが無かった。

SX09 (第30図) 平面プランは不整形な溝状で、規模は3.4m×1.2mに収まる程度、最深0.7m。床面の凹凸が著しい。埋土は明らかに人工的で、土層は地山の土(黄褐色土)と黒灰色土が混じった層の範疇で収まり、堅く締まっていた。

SX10 (第30図) 平面プランは不整形な円形で、直径2～2.2m、最深0.4m。床面には凹凸がある。埋土はあまり細かく分層されないが、地山の土(黄褐色土)と黒灰色土の範疇で収まり、堅く締まっていた。

SX11 (第30図) 平面プランは二又に分かれた不整形な溝状で、規模は1.5m×2.5mに収まる程度、最深0.3m。壁面と底面は凹凸が著しい。地山の土(黄褐色土)と黒灰色土が混じった層の範疇で収まり、堅く締まっていた。

(2) 土坑 (SK03～SK08) (第31図) 比較的整った形状でやや大きめの土坑を6基検出した。以下で個別に説明をおこなう。なお、どの土坑も地山から掘り込まれており、遺物は出土していない。

SK03 平面プランは弓状で、横断面はU字状を呈する。縦88cm、幅22cm、深さ16cm。埋土は暗灰色混暗褐色土1層である。

SK04 平面プランは長楕円形で、横断面はコ字状を呈する。長軸98cm、短軸36cm、深さ14cm。埋土は淡灰褐色土1層である。

SK05 平面プランは長楕円形で、断面は浅いU字状を呈する。長軸86cm、短軸48cm、深さ8cm。埋土は褐色土の中に暗灰色土が入り込んでいる。

SK06 傾斜地で検出された。平面プランは楕円形で、断面は浅いU字状を呈する。長軸118、短軸78cm、深さ15cm。埋土は褐色土の中に暗灰色土が入り込んでいる。

SK07 傾斜地で検出された。平面プランは角のある楕円形で、断面は凹凸が著しい。長軸128cm、短軸70cm、深さ10cm。埋土は褐色土の中にやや暗い褐色土と暗灰色土が入り込んでいる。

SK08 平面プランは長楕円形で、断面は浅いU字状を呈する。長軸64cm、短軸52cm、深さ7cm。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土1層である。

SK09 平面プランは長楕円形で、壁はほぼ垂直に下がる。長軸44cm、短軸26cm、深さ20cm。埋土は下から黄褐色粘質土、暗灰黄褐色粘質土である。

SK10 平面プランは不整形な円形で、断面はU字状を呈する。長軸64cm、短軸46cm、深さ20cm。埋土は下から暗黄褐色土、淡灰褐色土で、中央部に暗灰褐色粘質土が入り込んでいる。

SK11 平面プランは楕円形で、深い。長軸36cm、短軸24cm、深さ48cm。埋土は黒灰色土1層である。下端の形状が細長い楕円形をしている。古い樹根か。

SK12 傾斜地で検出された。平面プランは角のある円形で、断面は浅いU字状を呈する。長軸60cm、

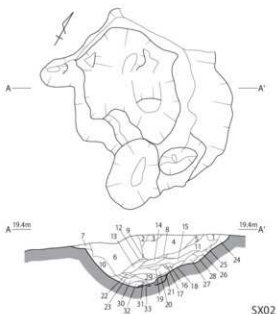
短軸44cm、深さ12cm。埋土は地下から褐色土、やや淡い褐色土、暗灰色土である。

SK13 傾斜地で検出された。平面プランは不整形で、断面は先細りしている。長軸60cm、短軸40cm、深さ27cm。埋土は黒灰色土1層である。古い樹根か。

(3) **加工段 (第31図)** 加工段を2か所検出した。いずれも地山面で検出したもので、建物跡を伴わず、遺物は出土していない。

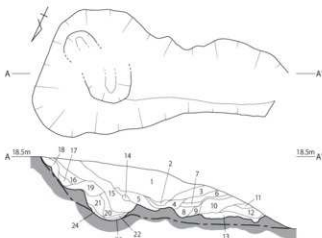
加工段01 東西2m、南北1mの加工段で、宅地造成に伴う北東隅の加工段と考えられる。本来の上端はもっと高いはずであるが、SX08に切られたと考えられ、残存する比高は40cmである。土層を見ると、平坦面に地山ブロックを含む灰色粘質土が水平堆積した後、斜面の上から落ちてきた白斑赤褐色土、赤橙斑淡黄灰色粘質土が堆積している。

加工段02 等高線に沿って北壁から5m南東までのびる加工段で、上端と下端の比高は10cm程度である。明確な段がつくところと緩やかなところがあり、埋土の黄褐色土と濃褐色土には小さな炭が混入していた。



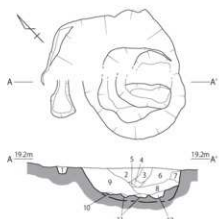
SX02

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 黒灰色土と淡黄褐色土斑に混じる | 18 暗褐色土 |
| 2 黄褐色土 | 19 黄褐色土に暗褐色土少し混じる |
| 3 暗灰色土 | 20 灰色土に黒灰色土斑に混じる |
| 4 明褐色土 | 21 淡黄白褐色土 |
| 5 淡黄褐色土と黒灰色土斑に混じる | 22 黄褐色土に暗褐色土混じる |
| 6 黄褐色～黒色粘質土 | 23 黄褐色土に暗褐色土少し混じる |
| 7 暗黄褐色粘質土 | 24 暗褐色土 (堆山) |
| 8 褐色土に黄白色ブロック混じる | 25 淡黄褐色土 |
| 9 暗黄褐色土 | 26 黒灰色土 |
| 10 褐色土に黒灰色土混じる | 27 褐色土 |
| 11 黄白褐色土 | 28 淡黄灰褐色土 |
| 12 黄褐色土 | 29 黄白褐色土に暗灰色土少し混じる |
| 13 黄褐色～黒灰色土 | 30 黒灰色土に黄褐色土混じる |
| 14 褐色土 | 31 明黄白褐色土 |
| 15 灰色土に暗褐色土少し混じる | 32 褐色土に明黄白褐色ブロック混じる |
| 16 黄褐色土に暗褐色土少し混じる | 33 黒色土 |
| 17 明黄褐色土 | |



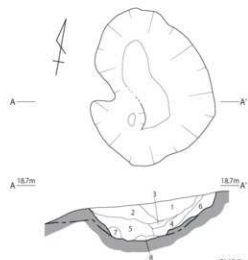
SX04

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 暗灰色土 | 13 やや灰色味帯びる明黄褐色土 |
| 2 淡明黄褐色土 | 14 明黄白ブロック |
| 3 淡灰色土と淡褐色土混じる | 15 黒灰色土 |
| 4 淡灰白色土に明黄褐色土混じる | 16 淡灰色土に淡黄白色土混じる |
| 5 暗灰色～明黄褐色土 | 17 明黄褐色土に淡灰色土混じる |
| 6 淡灰色土 | 18 明黄褐色土に淡灰色土混じる |
| 7 灰色土に明褐色土混じる | 19 淡灰色土 |
| 8 やや濃い明黄褐色土 | 20 淡灰褐色土 |
| 9 明黄褐色土と淡白灰色土混じる | 21 淡黄灰白色土 |
| 10 淡灰色土 | 22 明黄褐色土 |
| 11 淡灰色土に淡褐色土混じる | 23 やや濃い明黄褐色土 |
| 12 淡灰色土 | 24 淡黄褐色土 |



SX03

- 1 黄褐色土に暗灰色土混じる
- 2 明褐色～明黄褐色土
- 3 灰色粘質土
- 4 淡黄褐色土
- 5 明褐色土
- 6 暗灰色粘質土
- 7 灰色土と明黄褐色土混じる
- 8 黄褐色粘質土
- 9 黄褐色土と黒色土混じる
- 10 黒灰色土
- 11 灰色粘質土
- 12 明黄褐色ブロックに黒灰色土入る

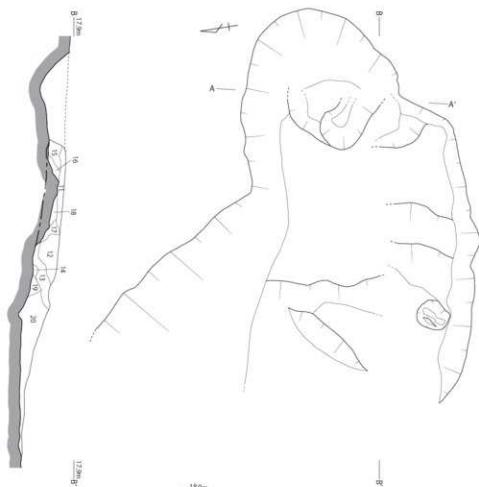


SX05

- 1 灰褐色土
- 2 やや濃い褐色土
- 3 灰褐色土に褐色土混じる
- 4 暗灰褐色土
- 5 褐色土に淡白褐色ブロック混じる
- 6 暗黄褐色土
- 7 暗灰褐色粘質層に淡白褐色ブロック混じる
- 8 灰褐色土

0 1:60 2m

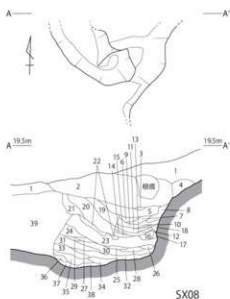
第28図 SX02～SX05 実測図 (S=1:60)



- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 暗灰褐色粘質土 | 11 灰色土～灰黄褐色粘質土 |
| 2 黄褐色土と暗灰褐色土混じる | 12 暗灰色粘質土 |
| 3 にぶい黄褐色土に灰色土混じる | 13 暗黄褐色粘質土と灰色土混じる |
| 4 灰色土～灰褐色土 | 14 暗黄褐色土 |
| 5 灰褐色土に黄白色ブロック混じる | 15 白灰色土と淡黄褐色土混じる |
| 6 暗褐色土 | 16 黄褐色土 |
| 7 黄褐色土 | 17 淡黄褐色土と白灰色土混じる |
| 8 灰褐色土に淡黄褐色土混じる | 18 黄褐色土 |
| 9 黄褐色土 | 19 黄褐色土と灰色土混じる |
| 10 明黄白褐色土 | 20 黄褐色土と暗灰色土混じる |

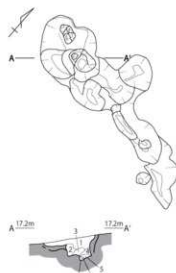
0 1:60 2m

第29図 SX06、07 実測図 (S=1:60)



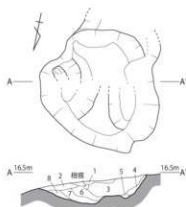
SX08

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 赤土、擾乱 | 20 ポロポロした黒灰色土 |
| 2 黒灰色土 | 21 暗灰色土に暗褐色土混じる |
| 3 淡黄褐色土 | 22 暗灰色土に暗褐色土と白色結質ブロック混じる |
| 4 暗褐色土 | 23 黒灰色土 |
| 5 暗黄灰色土、やや結質 | 24 細かい褐色土、盛り物多い |
| 6 暗灰色土 | 25 明黄白色土 |
| 7 灰色砂質土に橙色土少し混じる | 26 濃褐色砂質土 |
| 8 暗黄灰色土 | 27 暗褐色砂質土 |
| 9 暗褐色粘質土に暗灰色粘質土混じる | 28 暗褐色砂質土 |
| 10 暗灰色粘質土 | 29 暗褐色砂質土 |
| 11 明褐色粘質土 | 30 淡黄褐色砂質土 |
| 12 灰褐色土 | 31 暗褐色砂質土 |
| 13 暗灰色土 | 32 暗黄褐色砂質土 |
| 14 暗灰色粘質土に暗褐色土少し混じる | 33 暗黄褐色砂質土 |
| 15 暗灰色粘質土 | 34 明黄白色土 |
| 16 褐色土に黄白色ブロック混じる | 35 暗褐色砂層 |
| 17 灰色土と淡黄褐色土混じる | 36 暗黄褐色砂質土 |
| 18 淡灰褐色土 | 37 暗褐色砂と明黄白色褐色土混じる |
| 19 ポロポロした黒灰色土に暗褐色小ブロックわずかに混じる | 38 白色土と淡赤色土混じる |
| | 39 黄白褐色土と褐色土混じる |



SX09

- | |
|------------------------|
| 1 灰～暗灰色土に黄白、赤褐色ブロック混じる |
| 2 暗褐色土 |
| 3 黄白褐色土と白色土混じる |
| 4 黒灰色土 |
| 5 黄褐色土 |
| 6 暗灰色土 |
| 7 明黄褐色土 |



SX10

- | |
|----------------|
| 1 暗灰色土 |
| 2 黄褐色土に黒色土等混じる |
| 3 黒灰色土 |
| 4 やや細かい褐色土 |
| 5 やや細かい灰色土 |
| 6 淡黄褐色土 |
| 7 やや暗褐色土 |
| 8 やや暗黄褐色土 |

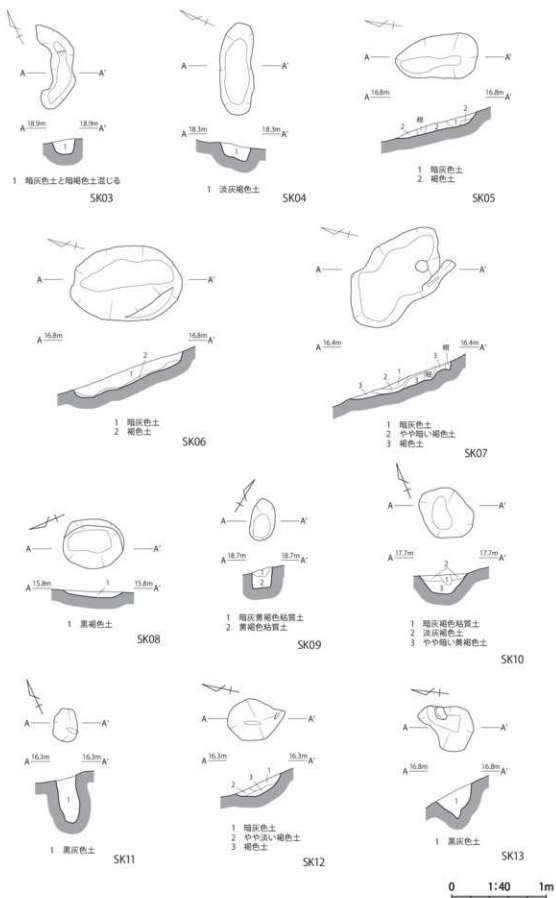


SX11

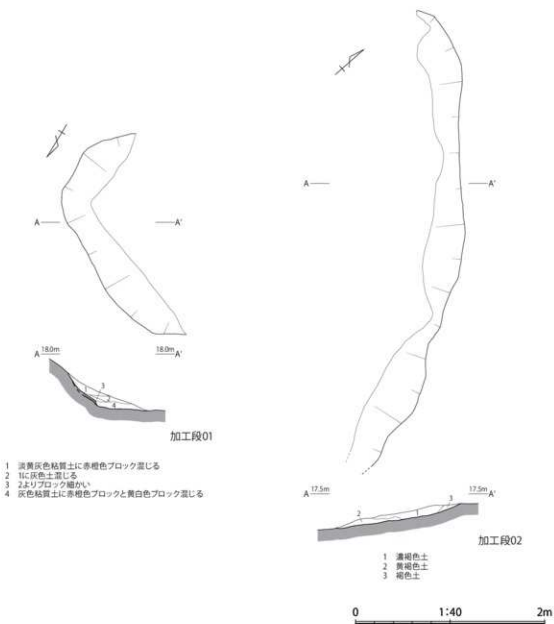
- | |
|---------|
| 1 灰色土 |
| 2 淡黄褐色土 |
| 3 淡褐色土 |
| 4 黒灰色土 |
| 5 黄灰色土 |

0 1:60 2m

第30図 SX08～SX11実測図 (S=1:60)



第31図 SK03～SK13実測図 (S=1:40)



- 1 淡黄灰色粘質土に赤褐色ブロック並じる
- 2 1に灰色土並じる
- 3 2よりブロック幅が1/2
- 4 灰色粘質土に赤褐色ブロックと黄白色ブロック並じる

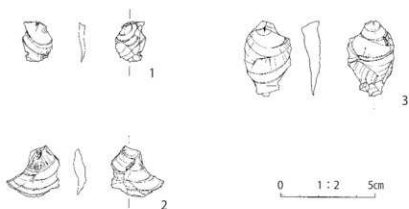
- 1 濃褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 褐色土

第32図 加工段01、02実測図 (S=1:40)

4. 遺構に伴わない遺物 (第33図)

遺構に伴わない遺物は、石材片3点が出土した。

1はE7区黒色土から出土した玉髄の小さな剥片である。明赤褐色を呈する。縦2.1cm、幅1.6cm、最大厚0.3cm、重さ1.1g。2はD5区から出土した玉髄の剥片である。明赤褐色を呈する。縦2.8cm、幅2.7cm、最大厚0.5cm、重さ3.53g。3はC7区暗褐色土から出土した玉髄の剥片である。明赤褐色を呈する。縦3.2cm、幅3.4cm、最大厚1.73cm、重21.53g。



第33図 遺構に伴わない遺物実測図 (S=1:2)

第4章 茶山遺跡（北側）の試掘調査

第1節 茶山3号墳の調査

1. はじめに

第1章で経緯を述べたとおり、事業予定地拡張に伴う試掘調査（平成26年6月）を実施したことから、本調査範囲の北側で古墳1基（茶山3号墳）を検出するに至った。本章は、試掘調査による部分的な成果ではあるがその内容を述べるものである。

なお、当該事業については、拡張前の事業予定地内から数えて、全体でT1～T8までの調査区を設定して試掘調査を実施しており、以下の記述は、古墳の主体部を検出した最も北側のT7調査区と、その南側に設定して墳丘裾部を検出したT8調査区の調査成果に基づいて報告するものである。

2. T7調査区（主体部の調査）（第34図）

調査は、事業予定地北側の最も高所（標高21.9m付近）に、隣接する団地や畑の造成から削り残された東西8m、南北15m程度の平坦な畑地部分があり、この範囲が旧地形を留める可能性が考えられたことから、ここに調査区（南北3.0m×東西1.5m）を設定して実施した。結果、ほぼ東西方向に主軸をもつ古墳の主体部を、期せずして調査範囲内にその短軸幅を取めるように南北に断割ることとなった。以下は、この試掘調査の範囲内で、確認・想定できた主体部の構造等について詳述する。

なお、調査にあたり、墓壇埋土内を掘削していることを看破できなかったため、主体部の掘り込み面である旧表土（23層）と、棺の南側板付近の地山を一部掘り抜いてしまった。また、今回の調査で最終的に、調査区東半は棺上面まで、西半は棺底（一部墳底）までを掘削している。

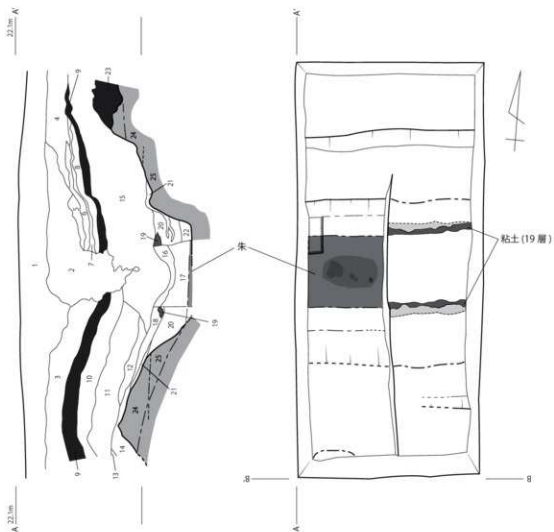
墓壇は、墳丘築造時の表土と考えられる黒褐色土（23層）から掘り込まれ、平面形は不明であるが、断面形は2段掘りであった。判明した墓壇の短軸規模は、上段の掘込み幅が約250cm、下段の掘り込み幅が約120cmで、墳底から掘り込み面までの深さは約80cmである。

埋葬施設は、棺材は確認できなかったものの、棺内の埋土と想定される17層の断面形から組合せ式の箱式木棺が埋納されたものと推測された。棺の長軸規模は不明であるが、土層から観察される幅は52cm、棺の深さは約30cm程度で、棺底は平坦であった。

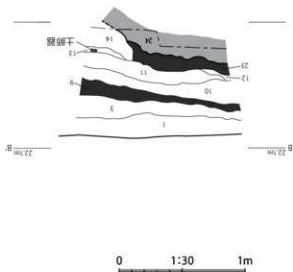
特筆されるのは、濃淡はあるが棺底の検出範囲一面に朱が検出されたことである。部分的には厚みが残るほどの量があり、未調査範囲を含めた棺内全体では比較的多量の散布があるものと予想される状況であった。また、棺上面で紐状に黄白色粘土（19層）が検出された。この粘土は、棺の長側板上縁に相当する位置にあり、土層観察から長側板と蓋との間を目張りしたものと判断された。

土層観察から、下段部分に棺が埋設された後、棺蓋上面からは15層により一気に埋め戻されていた。この15層は、主体部の掘り込み面を形成する旧表土（23層）をさらに20cm程度覆うように堆積していた。部分的な調査であるため確実なものではないが、墳丘の構築は主体部の埋戻し後に、盛土（15層）により造成された可能性が考えられた。

調査区南西部分で、盛土（15層）から当該主体部の埋土から地山に至るまでを掘り込む土坑（10～14層）が土層断面から確認された。平面的に検出できなかったことが悔やまれるが、土層の断面形態



- 1 褐色土 (耕作土)
- 2 赤色土と茶灰色土 (雑乱)
- 3 淡褐色土 (茶色ブロックわずかに含む)
- 4 2層より茶灰色土多い
- 5 茶褐色土 (茶色ブロック含む)
- 6 明茶灰色土に茶灰色土混ざる
- 7 暗褐色土
- 8 赤茶色土と茶灰色土混ざる
- 9 黒褐色土 (旧表土)
- 10 褐色土に明茶色土ブロック含む
- 11 明茶色土に褐色土混ざる
- 12 茶褐色土に明茶色土ブロック含む
- 13 黒褐色土
- 14 暗茶褐色土 (明茶色土ブロック含む)
- 15 茶褐色土 (地山ブロック多く含む)
- 16 15層よりややブロック少ない
- 17 15層よりブロックが大きい (雑乱に果あり)
- 18 茶色土 (褐色土混ざる)
- 19 黄白色粘土
- 20 茶色土
- 21 淡褐色土
- 22 暗褐色土 (茶色土混ざる)
- 23 黒褐色土 (旧表土)
- 24 淡茶灰色粘質土 (地山)
- 25 明赤褐色土 (地山)



第34図 T7調査区(主体部)実測図(S=1:30)

と堆積状況から上段と下段に分けられるものであった。まず上段（10～12層）は、調査区の南西隅で主体部上段の掘り方（23層）を一部切り込むもので、わずかに西に向かって深くなり、概ね30cm程度の深さを測る。この土坑上段の埋土は、a-a'の土層断面で棺腐朽後の陥没の影響を受けているものと観察されることから、棺の埋納時期からあまり期間を置かず掘り込まれて埋没したものと考えられる。下段（13～14層）は、調査区南西の一角で地山（24層）を掘り込むもので、深さは検出範囲で20cm程度を測り、南西に向けてさらに深くなる。現状では、この土坑上段と下段が一連のものではない可能性や、主体部と切り合う別の主体部の一角を検出している可能性も考慮されるが、現段階では性格不明と言わざるを得ない。なお、この土坑中（13層）から、土師器の小片1点（写真2）を検出している。

墳丘は15層による盛土で形成され、これを切る土坑が埋没した後、これらの上層は旧表土と考えられる黒褐色土（9層）で覆われていた。この旧表土は、部分的に上層の耕作等により希薄になるものの、調査区壁面全周で観察されるもので、木棺腐朽後の陥没に対応して調査区中央が落ち込んでいる。なお、さらに上層は現地表面を形成する耕作土もしくは耕作による攪乱層（1～8層）で、特に表層（1層）は客土されて現在に至るものと考えられた。

出土物については、棺底で取り上げた朱のサンプルと前述の攪乱中（13層）の土器片1点以外、検出されなかった。



写真2 土坑中（13層）出土土師器

3. T8調査区（墳端の調査）（第35図）

T7調査区で埋葬主体部が検出されたことから、周囲で唯一旧地形が残っている可能性があるとして設定された南側に、墳丘下端を確認することを目的として設定した調査区（0.6m×11.4m）である。

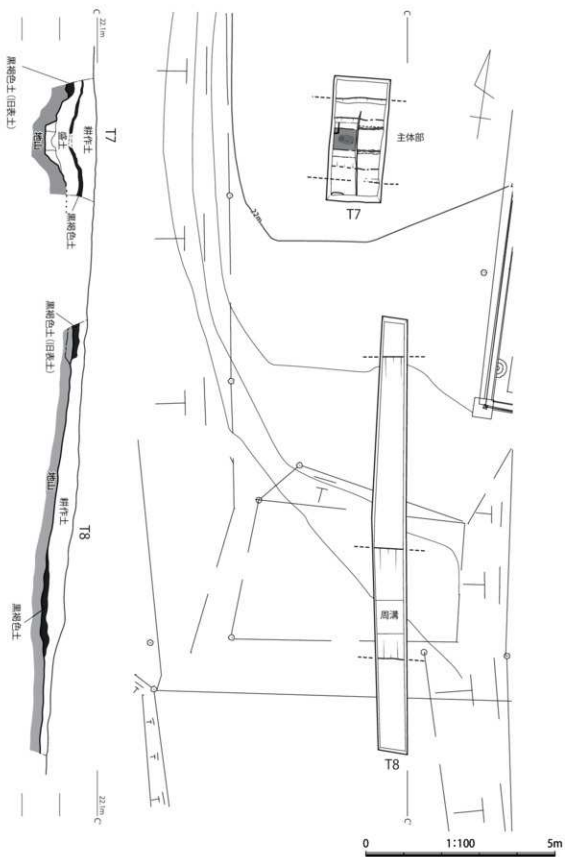
調査区北端の墳頂付近では、古墳築造以前の旧表土と想定される土層（T7調査区23層に相当するもの）が検出されたが、緩斜面部分になると耕作による攪乱が深く、ほぼ調査区全体が地山上面まで耕作土に覆われていた。その中で、主体部中軸から南へ10.8m付近から始まる、黒褐色土を覆土にもつ浅い落ち込みが検出された。落ち込みの幅は2.8m、深さは最大で20cm程度で、落ち込み南側は地山がほぼ平坦になっている。この落ち込みは東西とも調査区外に延びるもので、主体部の主軸にほぼ平行する溝状の遺構と考えられ、改変されてはいるものの周囲の地形も考慮すると、この落ち込み部分が墳丘裾部を形成するものと判断された。

出土物については、当調査区全体において確認されず、また、葺石等を予想させるような石材も検出されなかった。

4. 墳丘について（第36図）

墳形は、周囲が宅地や耕作による削平を受けて原形を留めておらず、また現時点の調査成果からは判断できなかった。

墳丘規模については、T7調査区で検出した主体部が、墓壇短幅でも2.5mという規模があり、棺底には朱の散布が見られ、また、墳丘構築と同時に埋葬されたものと考えられることから、当該古墳の中心主体を検出したものと推察された。このことから、この主体部を中心にT8調査区で検出した

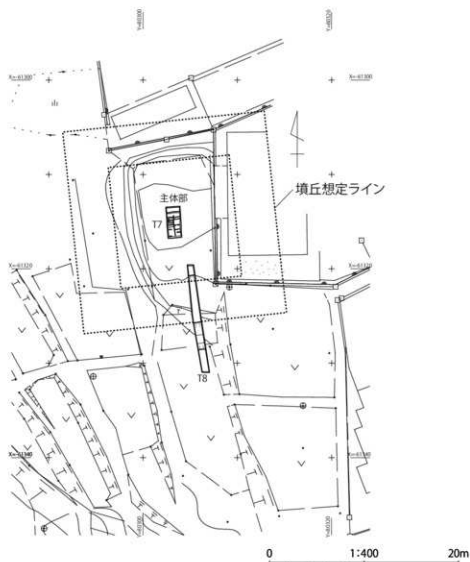


第35図 T8調査区実測図と周辺地形図 (S=1:100)

周溝を墳端として復元すると、約20m規模の墳丘であったと推定できた。

墳丘の高さについては、T8調査区の周溝最深部からT7調査区の盛土（15層）上面までを計測すると比高が1.06mしかなく、南側から見た墳丘の印象は非常に低平なものであったと思われる。ただし、削平を受けているため想像の城を出ないが、3号墳は西に向けて瘤状に突出した尾根の頂部に位置しており、西向きに威容を誇るものであったかもしれない。

築造時期については、試掘調査範囲において墳丘および主体部内からほとんど遺物が出土せず、明確な時期を特定することはできなかった。ただし、棺底に水銀朱が敷かれていること、同丘陵上に古墳時代前期の古墳が確認されていること等から、当該丘陵を墓域とする前期古墳群の一基を検出したものと想定される。また、立地や、想定される墳丘・主体部の規模、棺底の水銀朱など、3号墳は1・2号墳とは隔絶した内容をもつもので、当古墳群の盟主的な古墳であったものと推察される。



第36図 3号墳墳丘想定図 (S=1:400)

第2節 赤色顔料の蛍光X線分析について

松江市茶山遺跡（茶山3号墳）の埋葬主体部棺底から出土した赤色顔料の蛍光X線分析を行なった。

埋葬主体部に使用されている赤色顔料の種類としては、水銀朱（硫化第二水銀； HgS ）またはベンガラ（酸化第二鉄； Fe_2O_3 ）の使用が想定される。したがって、その種類を同定するために、蛍光X線分析による元素定性分析を行なった。

1. 試料と分析方法

試料は埋葬主体部の棺底から出土した赤色顔料である。周辺土壌とともに持ち込まれたものであったため、赤色を呈している箇所からプラスチックスプーンによって任意の量を採取し、Chemplex社製のマイラーを使用したカップ（マイラーカップ）に入れて、分析試料とした。作成した分析試料は5点である。

分析方法は、蛍光X線分析による元素定性分析である。使用機器は鳥根県古代文化センター所有・鳥根県埋蔵文化財調査センター設置「エスアイアイ・ナノテクノロジー社（現：株式会社日立ハイテクサイエンス）製SEA1200V X卓上型ケイ光X線分析計（エネルギー分散型）」である。

なお、当該装置では、Ti（チタン）より原子番号の大きい元素を重元素、小さい元素を軽元素として、測定室雰囲気それぞれ大気と真空に設定して、蛍光X線スペクトルピークを検出するための測定を行なっている。今回、検出が想定される軽元素として、硫黄（S）が含まれる可能性があったため、測定室雰囲気を大気と真空に分けた条件で測定を行なった。

測定条件は以下のとおりである。

励起電圧：50 kV（大気）・15 kV（真空）

管電流：管電圧の設定による自動設定（95～223 μA / 大気・175～266 μA / 真空）

測定時間：200秒（うち、測定可能な有効時間は134～136秒 / 大気・141～142秒 / 真空）

コリメータ（測定範囲）：直径8.0mm

測定室雰囲気：大気 / 真空

X線管球：Rh（ロジウム）

検出器：マルチカソードSi半導体検出器（SSD）

一次フィルタ：Pbフィルタ（大気：重元素）・Clフィルタ（真空：軽元素）

2. 結果

別添蛍光X線分析スペクトルデータに詳細を示す。

全ての分析試料からHg（水銀）とS（硫黄）の高いスペクトルピークを示した。Fe（鉄）のスペクトルピークも検出しているが、赤色顔料に混在する周辺土壌に由来するものと考えられる。

したがって、赤色顔料は水銀朱であると推測される。

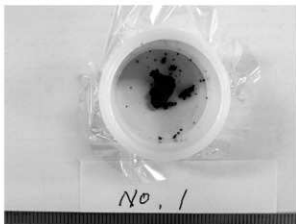
註1. 本田光子1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第31・32号 日本文化財科学会

市毛勲 1997『新版 朱の考古学』藤山園

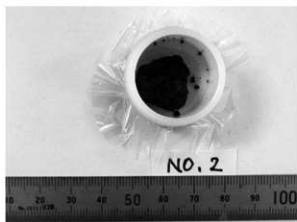
松江市茶山遺跡 赤色顔料 分析試料写真



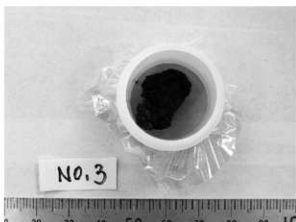
赤色顔料 塊



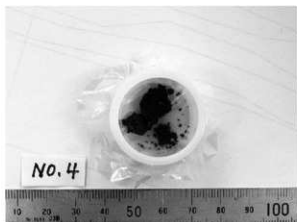
試料No.1



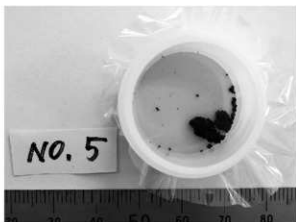
試料No.2



試料No.3

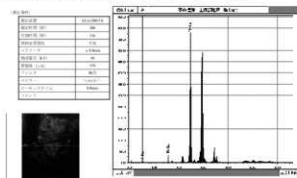


試料No.4



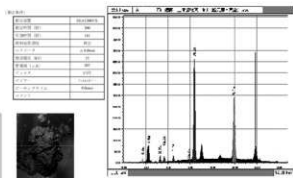
試料No.5

蛍光X線分析スペクトル No.1



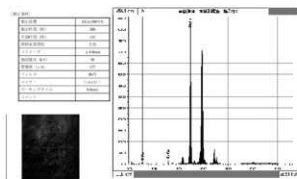
元素	濃度 (%)	Z	Wt%	Atom%
Fe	75.1	26	56.863	42.917
Ni	17.5	28	10.810	13.217
Cu	7.4	29	3.327	5.866

試料No.1 (大気)



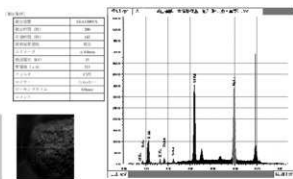
元素	濃度 (%)	Z	Wt%	Atom%
Fe	75.1	26	56.863	42.917
Ni	17.5	28	10.810	13.217
Cu	7.4	29	3.327	5.866

試料No.1 (真空)



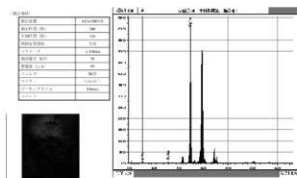
元素	濃度 (%)	Z	Wt%	Atom%
Fe	75.1	26	56.863	42.917
Ni	17.5	28	10.810	13.217
Cu	7.4	29	3.327	5.866

試料No.2 (大気)



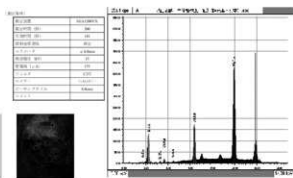
元素	濃度 (%)	Z	Wt%	Atom%
Fe	75.1	26	56.863	42.917
Ni	17.5	28	10.810	13.217
Cu	7.4	29	3.327	5.866

試料No.2 (真空)



元素	濃度 (%)	Z	Wt%	Atom%
Fe	75.1	26	56.863	42.917
Ni	17.5	28	10.810	13.217
Cu	7.4	29	3.327	5.866

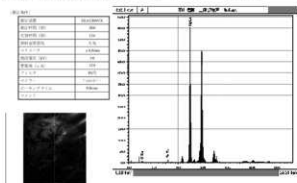
試料No.3 (大気)



元素	濃度 (%)	Z	Wt%	Atom%
Fe	75.1	26	56.863	42.917
Ni	17.5	28	10.810	13.217
Cu	7.4	29	3.327	5.866

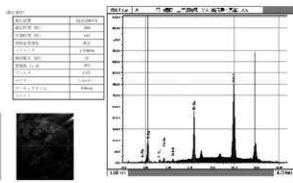
試料No.3 (真空)

蛍光X線分析スペクトル No.2



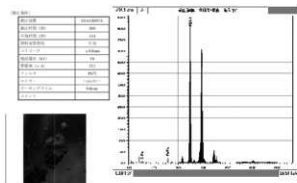
試料No.4 (大気)

元素	原子%	重量%	検出率
Fe	55.1	68.2	100
Ni	28.5	35.1	100
Cu	16.4	20.7	100



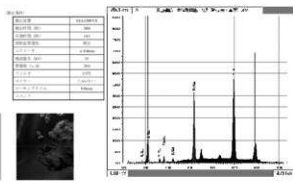
試料No.4 (真空)

元素	原子%	重量%	検出率
Fe	55.1	68.2	100
Ni	28.5	35.1	100
Cu	16.4	20.7	100



試料No.5 (大気)

元素	原子%	重量%	検出率
Fe	55.1	68.2	100
Ni	28.5	35.1	100
Cu	16.4	20.7	100



試料No.5 (真空)

元素	原子%	重量%	検出率
Fe	55.1	68.2	100
Ni	28.5	35.1	100
Cu	16.4	20.7	100

第5章 総括

茶山遺跡では、古墳群と近世の埋葬関連遺構、土坑群などが検出された。

土坑群については、遺物が出土していないため時期は不明であり、性格についても配置に規格性がみられなかったことから建物を構成するものとは考えられないものであった。形状的には粘土の採掘坑の可能性も考えられたが、地山を断ち割り確認した範囲では明確な粘土層は認められず、今後の類例を待って検討したい。

以下では、今回確認された古墳群の各様相についてまとめることとする。

古墳群は前期古墳3基からなり、当時期の古墳としては浜乃木町地内で初めての発見であった。

立地は、穴道湖東岸にある独立丘陵上の眺望の良い場所を占地しているものである。

古墳群の構成については、3号墳が丘陵上の最も高い場所に立地し、一辺約20mに復元される規模の大きい古墳であることから盟主的な古墳であると推察され、1、2号墳がこれに従属する10mに満たない小規模古墳と位置付けられる。ただし、丘陵全体を俯瞰すると、1、2号墳が立地する尾根筋から北に向かう当該丘陵の尾根筋は、調査範囲の東辺に沿って3号墳まで続いていたと考えられる。現在では大半が削平され原形を留めていないが、かつては連綿と築かれた古墳群が存在していた可能性も考慮しておく必要があり、既に造成された団地の一角に、荒神として祭られた古木の周辺が小高く削り残されていることも、このことを想起させるものであった。

古墳の築造方法については、1、2号墳は基本的に尾根筋を溝で区切って地山を削り出して築造されたもので、前期の小規模古墳に一般的にみられるものであった。3号墳については部分的に盛土により形成されたもので、主体部の埋め戻しに際して盛土で墳丘を構築した可能性が指摘できるものであった。なお、3号墳に類似の築造工程が考えられている古墳には、当該丘陵の南方にある田和山2号墳^{田和山2号墳}や、棺の構造は違うものの穴道湖北岸にある釜代1号墳^{釜代1号墳}が挙げられる。

古墳の新旧関係については、1、2号墳は東西に隣接して築かれた古墳であったが、その間に2mの空白部を挟んでおり、両古墳の新旧関係は土層から判断することはできなかった。周溝から出土した土器を見ると、2号墳から出土した壺と高坏は小谷2式^{小谷2式}に分類されるものであり、1号墳から出土した壺はあまり類例を見ないものの、大きく外反する口縁をもち、頸部尖帯の下に文様が施される点は小谷2式に新しい要素が加わったと解釈できるものであった。このことから、(古)2号墳→(新)1号墳の新旧関係を指摘できるが、立地から予想される新旧関係とは相反するため、現段階では僅差はあるものの、ほぼ同時期に築造されたものと考えておきたい。3号墳については、時期を特定する遺物もなく、1、2号墳とは地理的な隔りもあるため直接的に新旧の検証はできなかったが、古墳群の盟主的な古墳と考えられることから、従属する1、2号墳に先行する可能性が高いものと判断される。また、朱の使用状況から前期初頭まで遡る可能性も考えておきたい^{朱の使用}。

主体部については、1号墳は舟底状刳抜木棺、2号墳第1、3主体部及び3号墳は組合せ式の箱式木棺が納められたものであった。いずれも前期古墳に一般的にみられるものであるが、うち3基の主体部で白色系の粘土の使用が顕著に観察され、当古墳群を特徴付けるものであった。なお、2号墳の

第2主体部については長軸1.35mの小さなもので、棺の痕跡は検出されなかった。

頭位については、1号墳の主体部のみ、棺内南側の石材の下から鉄斧が出土したことから南頭位であったと推測された。この他の主体部については、頭位方向を検証する明確な要素は見いだせなかった。ただし、検出された全主体部の主軸は、尾根筋に直交するもの（1、2号墳）と並行するもの（3号墳）のいずれかであり、方角的に一定の頭位を志向するというより、地形的な配置理念が優先されているものと考えられる。

副葬品は1号墳から鉄斧と茎の中央付近で曲げられたヤリガンナ、2号墳の第2主体部から刀子破片と不明鉄製品の破片1点が出土した。この中で特に注目されるのは、1号墳から出土した茎の中央付近で曲げられたヤリガンナである。意図的に壊した鉄製品を副葬することは西日本一帯の広い範囲にみられる行為で、共通の習俗が存在していたことを示すものである。曲げられたヤリガンナの出土例は、松江市内では社日古墳群1号墳第3主体部、奥才古墳群14号墳第1主体部、岩鼻古墳群1号墳第1主体部に次ぐ4例目となり、その他県内では大田市の庵寺古墳群8号墳第1主体部、安来市の小谷古墳第2主体部からも出土している。

以上、今回の調査により、安道湖東岸では類例の少ない前期古墳群の様相を知ることが出来た。当古墳群の南側には、弥生時代の貼石墓や四隅突出型墳丘墓が確認された友田遺跡が存在し、さらに国指定史跡である、弥生時代の3重の環壕をもつ田和山遺跡も存在している。前時代の注目される遺跡が存在する地域が、古墳時代を迎えてどのような経緯を辿るのかは非常に興味深いところであり、今回はその一端を垣間見ることが出来る非常に貴重な発見であった。今回の調査成果を加えた今後の検証により、当該地域史がさらに明瞭に復元されることに期待したい。

註1. 松江市教育委員会「田和山遺跡」2005

2. 松江市教育委員会「釜代1号墳外発掘調査報告書1」1994

3. 土師器の編年については、松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」（『鳥根考古学会誌』第8集所収）、松山智弘2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」（『鳥根考古学会誌』第17集所収）を参考にした。

4. 弥生墳丘墓では朱を棺床一面に敷く例が多いが、中小規模の前期古墳では朱を部分的に使用する例が多い。

5. 建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会「社日古墳」2000（※16頁で、「この（農具）の副葬位置の相違について、以下出雲の他の前期古墳例も交えて検討しておきたい。」とし、「出雲では、（中略）遺体の足下か頭部上方付近のどちらか一方に副葬される例が多く、前期を通じてどちらかの位置に副葬される例が見られる。この中でも、遺体の頭部上方付近に副葬する例が、足下に副葬する例の2倍ほど見られ、頭部に副葬する例が多い。」と分析されている。）

6. 5と同じ

7. 鹿島町教育委員会「奥才古墳群」1985

8. 中国電力株式会社・鳥根県教育委員会「鳥根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1」2008

9. 国土交通省松江国道事務所・鳥根県教育委員会「庵寺古墳群Ⅱ 大迫ツリ遺跡 小釜野遺跡」2014

10. 近藤正「安来平野における土壌墓」『上代文化』第36輯1966（『山陰古代文化の研究』1978）

11. 松江市教育委員会「松江園部市計画事業乃木地区区画整備事業区域内埋蔵文化財発掘調査報告書」1983

12. 1と同じ

写真図版



茶山遺跡（古墳群）調査前風景（北東から）



茶山遺跡（北側斜面）調査前風景（南から）



古墳群等完掘状況（北東から）



北側土坑群等完掘状況（西から）



1号墳完掘状況（西から）



1号墳墳丘検出状況（西から）



1号墳a-a'の地山削り出しと周溝土層堆積状況（東から）



1号墳東側周溝遺物出土状況（東上から）



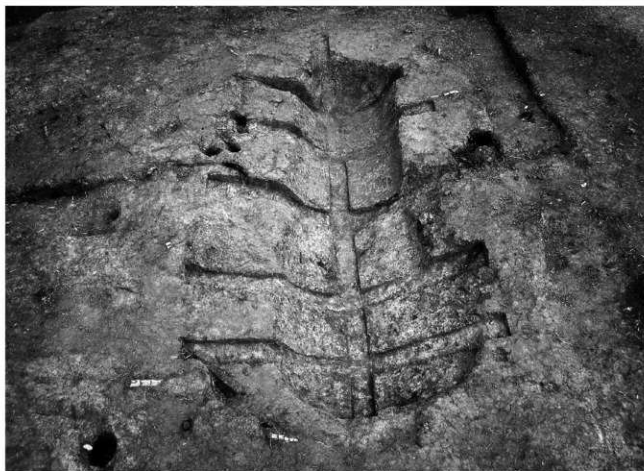
1号墳主体部短軸土層断面（南から）



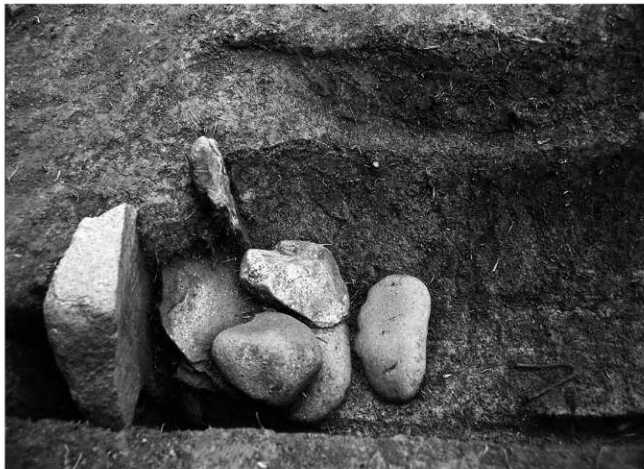
1号墳主体部長軸土層断面（南東から）



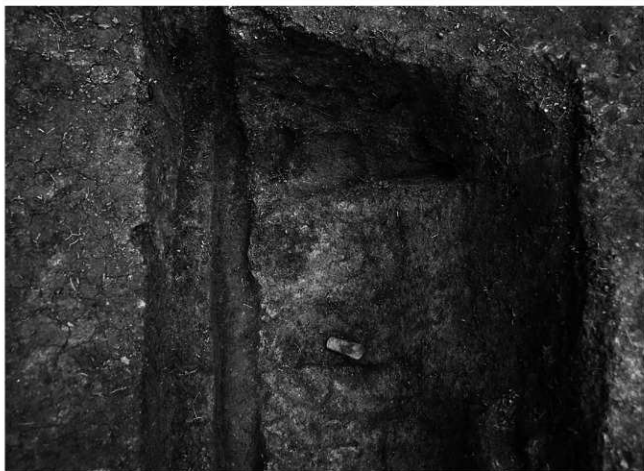
1号墳主体部棺床検出状況（北から）



1号墳主体部完掘状況（北から）



1号墳主体部の石とヤリガンナの出土状況（東から）



1号墳主体部の鉄斧出土状況（北から）



2号墳完掘状況（東から）



2号墳東側周溝の土層堆積状況（東から）



2号墳北側墳裾の地山削り出し状況（東から）



2号墳東側周溝遺物出土状況（東から）



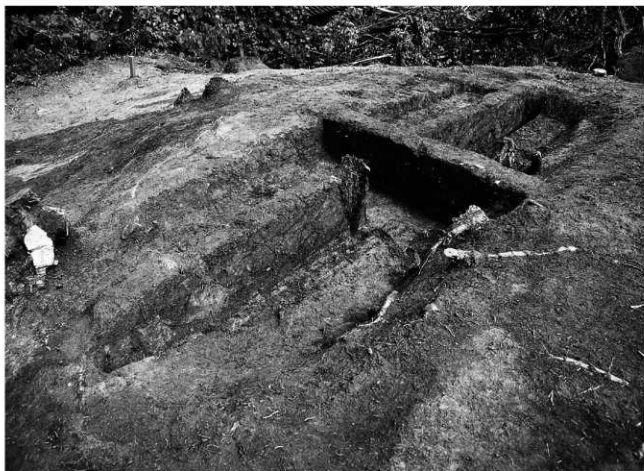
2号墳第1主体部平面プラン検出状況（東から）



2号墳第1主体部完掘状況（東から）



2号墳第1主体部短軸土層断面（南東から）



2号墳第1主体部長軸土層断面（南東から）



2号墳第2主体部調査状況（東から）



2号墳第3主体部断面と標石（南から）



2号墳第3主体部短・長軸土層堆積状況（北東から）



2号墳第3主体部完掘状況（東から）



近世墓1の石出土状況（北から）



近世墓1底部の遺物出土状況（北から）



近世墓2検出状況（西から）



SX02 セクション（南から）



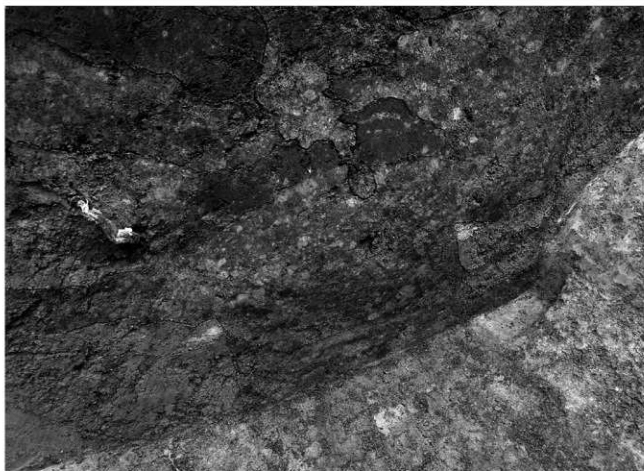
SX04セクション (北西から)



T7調査区 (3号墳主体部) 完掘状況 (北東から)



3号墳主体部検出状況（南から）



3号墳主体部館内土層堆積状況（南東から）

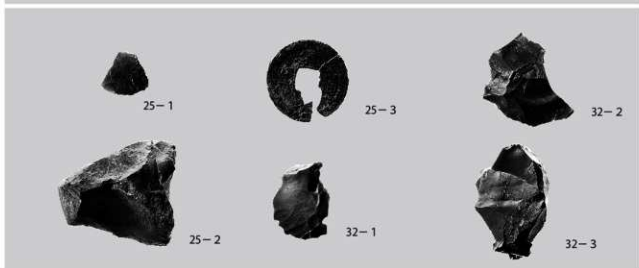


T8 調査区完掘状況 (南西から)



3号墳墳端部の土層堆積状況 (北西から)





報告書抄録

ふりがな	ちややまいせき						
書名	茶山遺跡						
副書名	浜乃木四丁目宅地造成に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第161集						
編著者名	江川幸子・徳永 隆・上山晶子						
編集機関	松江市教育委員会（歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室） 公益財団法人松江市スポーツ振興財団						
所在地	（歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室） 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL：0852-55-5284 （公益財団法人松江市スポーツ振興財団） 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL：0852-85-9210						
発行年月日	平成26年11月30日						
所取遺跡	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
茶山遺跡	島根県 松江市 浜乃木 四丁目 896外	32201	D1132	35°26'37"	平成26年 6月5日 ～ 平成26年 8月4日	763㎡	宅地造成
				133°3'4"			
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
茶山遺跡	古墳 近世墓 散布地	古墳時代 江戸時代	古墳 近世墓 土坑	石器 土師器 須恵器 陶磁器 鉄製品			

松江市文化財調査報告書 第161集
浜乃木四丁目宅地造成に伴う発掘調査報告書

茶山遺跡

平成26(2014)年11月

発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印刷 松栄印刷布
島根県松江市西川津町667-1
